

## 第2節 上総の陣屋

### 1. 【折戸陣屋】（旗本陣屋）<sup>おりと</sup> 山武市折戸字古屋敷ほか ／上総国武射郡 折戸村

1. 当主 山口重政<sup>しげまさ</sup>

2. 封地 天正19（1581）年：上総国内5,000石～慶長18（1613）年改易

3. 位置 文献①には「大字折戸字古屋敷に在り、今猶形跡を存す」とあり、妙隆寺一帯が該当する。

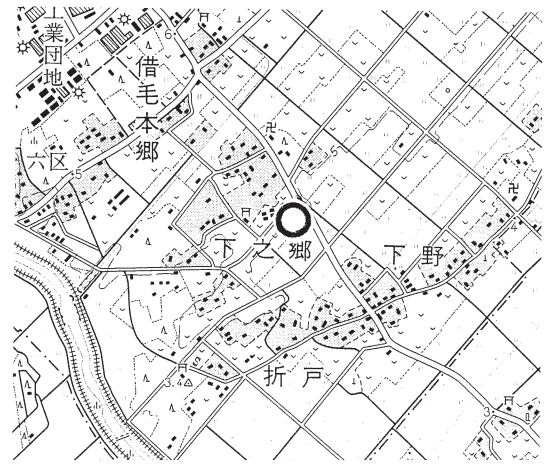
4. 規模 妙隆寺一帯は沼地に面した島状の地で、旧状は凡そ60m四方の寺域であった。なお、古屋敷の小字は西側にもわたっており、あるいは家臣団の屋敷地の名残であろうか。

5. 歴史 山口氏は多々良氏の族にして、代々尾張織田氏に仕えたが、天正19年、徳川家に臣従し、上総国内で5,000石を賜り、秀忠に付属した。慶長6年に武蔵国、慶長16年下野国においてそれぞれ5,000石を加えられ、併せて15,000石の大名となったが、同18年に「故ありて御勘気かうぶり」（寛政重修諸家譜）、改易となった。そのためか、関連文献に乏しく、資料にも事欠き、妙隆寺にも伝承として残されていない。

#### 6. 関連文献

①千葉県 1919『千葉縣誌』巻下

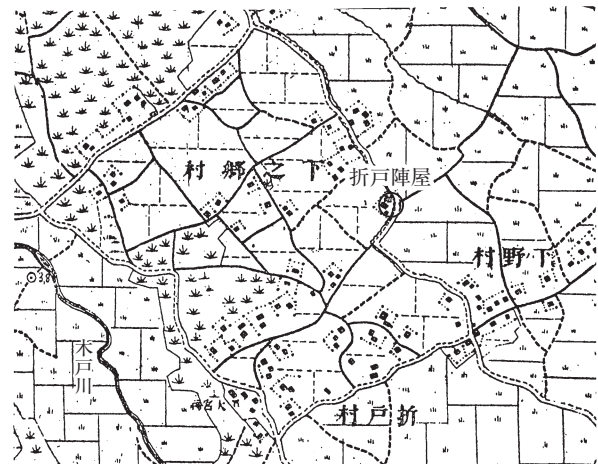
#### 7. 関連資料（特になし）



第54図 折戸陣屋の位置



図版51 折戸陣屋跡遠景



第55図 折戸旧状（明治16年迅速図）

2. <sup>なるとう</sup>【成東陣屋】（結城藩出張陣屋） 成東町成東字上町

／上総国武射郡成東村

1. 当主 水野勝長—勝政—勝庸—勝前—勝起—勝剛—  
勝愛—勝進—勝任—勝知—勝寛

2. 封地 元禄13（1700）年：下総・上総国内（山辺・武射郡内7,000石）10,000石～明治4（1871）年

3. 位置 成東公園南西山麓の児童公園一帯に相当し、南側は用水路が濠の代わりとなる。文献①には「堀及土手等ヲ存スト云フ」とある。

4. 規模 文献②には「面積千六十五坪」とある。これは資料①の陣屋範囲とはほぼ一致する。

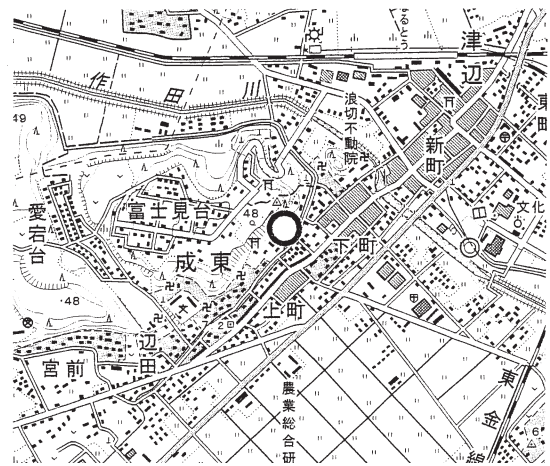
5. 歴史 元禄13年、水野勝長は能登国西谷から上総国2郡内の領地を併せ結城へ移封された（結城藩）。上総国分領は山辺3村、武射11か村で、前者が現東金市域、後者が旧成東町と山武町（現山武市）に属し、その中心が成東であった。上総領は併せて7,000石に及び、その支配の為の陣屋が成東城下の山麓に営まれた。陣屋は資料①によれば、古城の山麓を流れる小川を堀とし、さらにその東西を区画した凡そ60m四方の地で、南側に門、西側に牢屋や蔵があった。結城藩はその後まもなく加増され18,000石の大名となったが、以後は藩領も固定し、幕末まで存続して、陣屋もそのまま維持された。

6. 関連文献

- ①小沢治郎左衛門 1889『上総国町邨誌』
- ②千葉県 1919『千葉縣誌』巻下
- ③結城市 1983『結城市史』第五卷近世通史編
- ④成東町 1986『成東町史』
- ⑤山崎 庸 2003『成東町の城郭』

7. 関連資料

- ①「上総国武射郡成東村絵図面」（「椎名家文書」／文献④・⑤）



第56図 成東陣屋の位置



図版52 成東陣屋跡近景



図版53 成東陣屋部分（資料①）

3. 【東金陣屋（下ヶ津陣屋）】（福島藩出張陣屋）東金市

東金字下ヶ津ほか／上総国山辺郡辺田方村

1. 当主 板倉重矩—重種—重寛—重泰—勝里—勝承—勝  
 とう かつゆき かつのり かつなが かつとし かつあき かつひさ かつ  
 任—勝行—勝矩—勝長—勝俊—勝顕—勝尚—勝  
 さと  
 達

2. 封地 寛文11（1671）年：下野・山城・摂津・三河・  
 上総国内50,000石（山辺郡内5,000石）下野烏山  
 城主～明治2年：岩代国大沼約30,000石

3. 位置 八鶴湖に面する現大多和医院宅一帯。

4. 規模 不明ながら、大多和家屋敷地一帯が該当すると思  
 われる。凡そ70m四方の範囲か。なお、米  
 蔵が上宿・新宿・田間・二又・養安寺にあり、とりわけ田間米蔵は戦後まで五十瀬神社の鳥居  
 前に現存していたようであり、一方、二又米蔵は現在の石田家宅地内にあったという（文献  
 ②）。これは資料①によっても確認出来る。

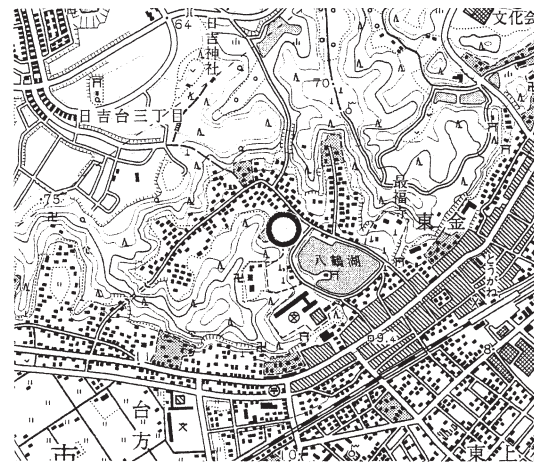
5. 歴史 板倉氏中興の祖は家康の信任厚い初代の京都所司代板倉勝重に求められ、重矩はその孫に当た  
 る。寛文11（1671）年に山辺郡5,000石を与えられ、この時点で陣屋が建設された可能性がある。  
 しかし、文献①には何に拠ったかわからないが、「元禄4年未年四月下ヶ津屋敷ニ御陣屋建築  
 セリ…宝永元申年奥州福島城拝領セシニヨリ下ヶ津陣屋ハ取壊シテ江戸上屋敷へ移し残余ノ建  
 家ハ大多和平左衛門名主勤役中類焼セシニヨリ居宅ニ賜ル」との記載がみられる。板倉氏が岩  
 槻、苗木を経て陸奥福島へ転封になったのは、元禄11（1698）年のことで、文献⑥に拠れば、  
 福島城主板倉氏分領東金代官として、明和9年～明治2年まで18名の名が確認され、平均6年  
 の在任となる。なお、歴代代官は文献①にまとめられている。

6. 関連文献

- ①杉谷直道 1914『東金町誌』
- ②福島市史編纂準備委員会 1966『福島市史資料叢書 第17輯 千葉県佐倉文書・東金文書』
- ③東金市 1980『東金市史』史料篇三
- ④東金市 1993『東金市史』通史篇上六
- ⑤福島県歴史資料館 2000『近世ふくしまの大名展 福島藩板倉氏資料を中心として』
- ⑥福島市 1973『福島市史』近世Ⅱ

7. 関連資料

- ①「板倉内膳正様東金町御領分扣」（文献③）
- ②「東金領年貢関係文書」（文献③）



第57図 東金陣屋の位置



図版54 東金陣屋跡近景

4. 【大網陣屋】(大名陣屋) 大網白里市大網字本宿ほか

／上総国山辺郡大網村

1. 当主 ①三浦重成一重勝

②米津政敏

2. 封地 ①天正18(1590)年：上総国山辺・長柄郡内  
10,000石～寛永8(1631)年：断絶

②明治2(1869)年：武蔵・常陸・下総・上  
総国内(山辺郡内ほか)11,000石～明治4  
(1871)年

3. 位置 三浦氏の陣屋跡は不明ながら、2代の供養塔  
が蓮照寺にあることや、旧領主の居城を利用  
している例が多いことから、大網城下の南麓一帯と推測される。米津氏は同じくその一角の現  
大網小学校校地との伝承がある。

4. 規模 三浦氏については不明ながら、米津氏陣屋は地形条件から凡そ南北60m、東西100mほどと推  
測される。

5. 歴史 ①三浦氏は相模三浦氏の一族佐原氏の系統にして、遠江国敷知郡内に拠り、戦国期に徳川氏に  
仕えた。天正18年の関東入国時に上総国大網・本納ほか(一説に佐倉)で13,000石(寛政重修  
諸家譜)を与えられた。寛永8(1631)年8月に重勝は没し、継嗣なく封地は収公された。②  
米津氏は自ら希望して出羽長瀨から明治2年に大網へ移され、陣屋の建設に取りかかったが、  
僅か2年で明治4年を迎えた。なお、仮陣屋は蓮照寺に置かれた。

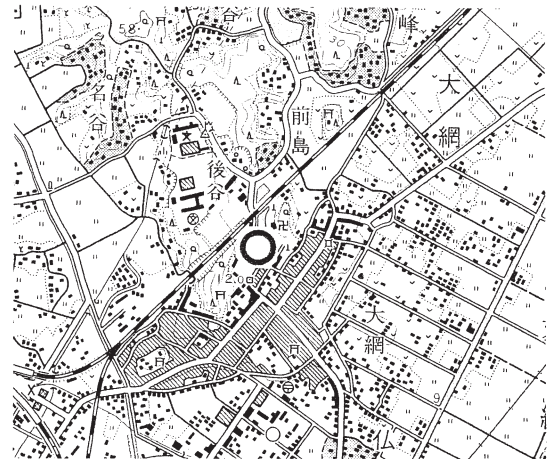
6. 関連文献

①山武郡教育会 1916『山武郡郷土誌』

②大網白里町 1986『大網白里町史』

7. 関連資料

①蓮照寺三浦監物供養塔銘文



第58図 大網陣屋の位置



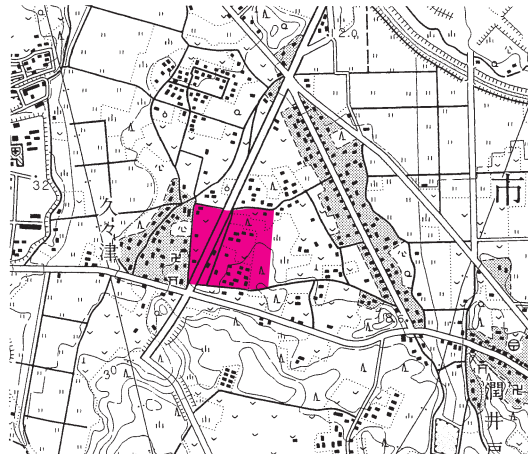
図版55 大網陣屋比定地(大網小学校校地)



図版56 蓮照寺三浦氏石塔

5. 【潤井戸陣屋】(大名陣屋) 市原市潤井戸字南大林ほか／上総国市東郡潤井戸村

1. 当主 永井尚政なおまさ
2. 封地 元和5(1619)年:15,000石～寛永3(1626)年古河城主:約90,000石
3. 位置 通称潤井戸新田上新宿西側の久々津と接する辺りの台地上方形区画(約250m四方)が該当すると思われる。
4. 規模 資料①には「永井信濃守御陣屋跡高拾石余ニテ □保田内膳正様御代高二入 歩数四町五反式畝歩」とある。一方、近代の『市原郡誌』には「潤津村大字潤井戸区の西方にありて大約方三町此地数字に互る」とみえる。その規模からして、字北大林、南大林ほかに渡る広域の地が想定される。
5. 歴史 永井氏は直勝代に大名として独立し、子尚政は將軍秀忠の近習(近侍の三臣)として頭角を現し、元和5(1619)年、「上総国潤井戸にをいて一万石を加賜」(「寛政重修諸家譜」)された。以後、徳川初期政権内において昇進を重ね(老中)、寛永3(1629)年には、89,000石で古河城主となった。永井氏の潤井戸在住はこの間の僅か7年にすぎないが、天和2(1682)年までこの地は永井氏領であった。陣屋跡は近代の文献②に「概して殿山或は殿台と称す」また文献①に「此ニ於テ陣屋廃ス今松林タリ然レドモ稍陣屋址ノ形跡ヲ存ス」とあるが、現在その形跡は不明瞭である。しかし、永井氏の格やその年代からして、多少城郭構えの可能性もある。なお、資料②に拠れば「延宝9年酉年迄凡右之高也…永井式部少輔殿御知行所 御家中篠崎甚兵衛 藤村権太夫 森久右衛門御代官同勘右衛門同仁兵衛同安太夫」とあるが、この御代官が陣屋支配に当たったのであろうか。



第59図 潤井戸陣屋の位置

6. 関連文献

- ①小沢治郎左衛門 1889『上総町郷誌』
- ②市原郡教育会編 1916『市原郡誌』
- ③市原市 1998『市原市史』資料編 近世編2
- ④中村てい 1983「潤井戸の陣屋とその由来 (潤井戸の郷土史研究その(二))」『上総市原』第5号

7. 関連資料

- ①「潤井戸村明細帳写」(文献③所収)
- ②「潤井土村万覚書帳」(文献③所収)

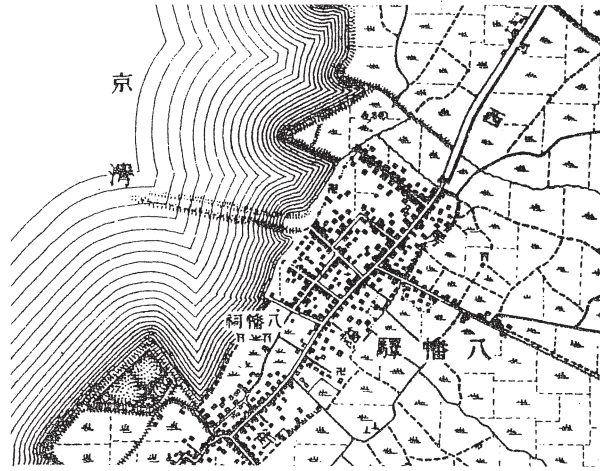


図版57 潤井戸陣屋跡近景

6. 【八幡陣屋】 1 (大名陣屋) 市原市八幡／上総

国市原郡八幡村

1. 当主 堀直良なおよし一直なおさだ宥
2. 封地 寛文8 (1668) 年：越後・上総国内 (夷隅・市原・埴生・長柄郡内) 約10,000石  
～元禄11 (1698) 年越後国転封
3. 位置 堀氏陣屋は大久保氏陣屋と混同されている場合があるが、堀氏のほうが早く八幡に入っていることから、大久保氏とは別の位置にあることは確かである。しかし、その具体的な位置は不明である。但し、八幡宮の近辺で且つ仲町でないとしたら、浜本町ないし妙長寺付近であろうか。
4. 規模 不明である。
5. 歴史 堀氏は寛文8年に上総菟谷から八幡へ移ったが、それ以前から八幡に所領の一部があったようで、八幡宮の一角には蔵地も構えていた (資料①)。江戸に近く内房の有数の湊でもあった八幡の利便性故であろうか。なお、堀氏の来歴については、菟谷陣屋の項を参照のこと。
6. 関連文献  
①山岸弘明 2005「鶴牧城と五井陣屋 市原の近世城郭」『平成17年度 歴史散歩資料 市原市五井・姉崎地区の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会
7. 関連資料  
①「飯香岡八幡宮文書①」(市原の古文書研究会 2005『市原の古文書研究第3集』)



第60図 八幡旧状 (明治16年陸軍迅速図)



図版58 飯香岡八幡宮



図版59 房総往還現状 (仲町付近)

7. 【八幡陣屋】<sup>やわた</sup>2（旗本陣屋）市原市八幡字仲町／上総国市原郡八幡村

1. 当主 大久保忠高<sup>ただたか</sup>

2. 封地 貞享元（1684）年：武蔵・甲斐・丹波・上総国内8,500石～元禄10（1699）年：近江・丹波・甲斐国内10,000石転封

3. 位置 文献①には「字仲町ニ在り今宅地及耕地タリ貞享三年丙寅十月大久保忠高陣屋ヲ営ミ」とある。仲町とは現在の八幡郵便局から市原市武道館一帯を指すが、文献②では武道館後ろの地を想定している。

4. 規模 資料①が大久保氏時代の姿を示しているとすれば、南北38m・東西67m程の長方形の区画に相当し、周囲を水堀が巡る。文献①には「面積八百七十七坪にして地勢平坦なり。」と記し、これは文化6（1809）年の資料①の約2反2畝より上回る。堀までを含んだ面積であろうか。ただ何れにせよ、既に指摘されているように（文献③）、陣屋としては小規模であり、御殿地のみが遺存した結果かもしれない。

5. 歴史 大久保忠高は忠知の長男で、親から受け継いだ1,000石代の旗本から昇進を重ね、天和3（1683）年には將軍綱吉の側衆、3年後の貞享3（1686）年には1万石の大名となった。「恩榮録」には、「加千三百石 上総八幡 大久保伊豆守忠高 十月十三日 合一万石 御側」とある。元禄10（1699）年、上総の所領を近江に移され、陣屋は廃された。

6. 関連文献

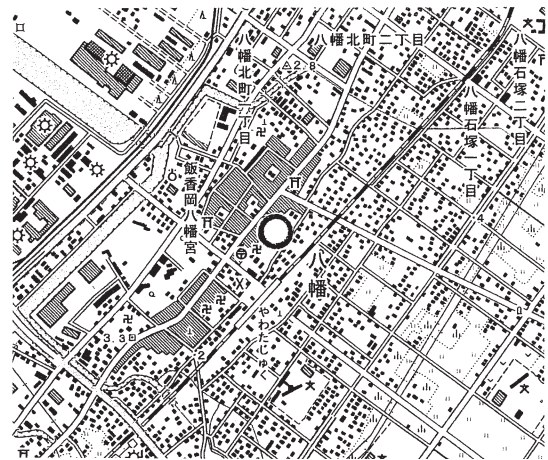
①小沢治郎左衛門 1889『上総国町郷誌』

②小川浩一 2002「八幡陣屋跡」ほか『平成13年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会

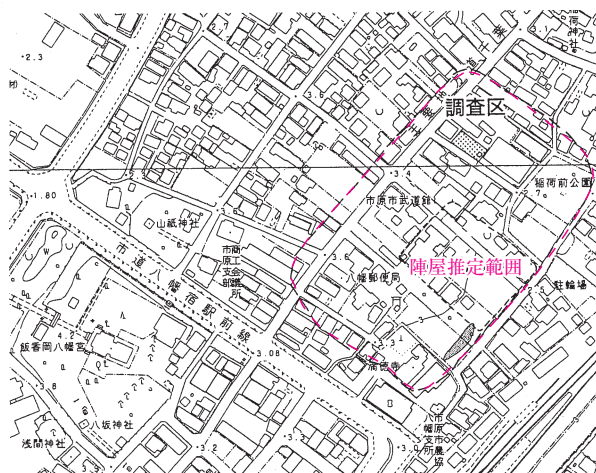
③山岸弘明 2005「鶴牧城と五井陣屋 市原の近世城郭」

7. 関連資料

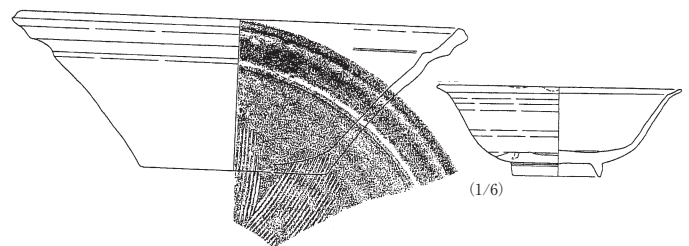
①「御陳屋屋敷ノ絵図」（鈴木家文書／市原の古文書研究会 2005『市原の古文書研究第3集』）



第61図 八幡陣屋の位置



第62図 平成13年武道館北東調査区（文献②）

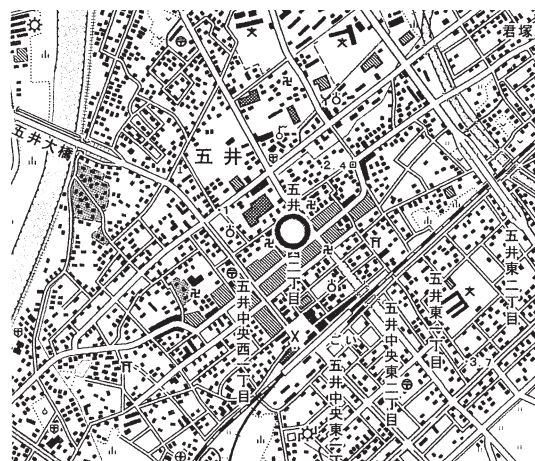


第63図 同左出土遺物（17世紀代）

## 8. 【五井陣屋】（大名陣屋）市原市五井字柳前ほか／上

総国市原郡五井村

1. 当主 ①松平家信  
②神尾守勝—守正—某  
③有馬氏恕—氏保—久保—氏貞—氏郁
2. 封地 ①天正18（1580）年：上総国市原郡内5,000石～慶長6（1601）年：三河国形原5,000石  
②（承応元（1652）年）：上総国市原郡内他3,000石～享保2（1717）年断絶  
③天明元（1781）年：伊勢・下野・上総国内（市原郡内）10,000石～天保13（1842）年伊勢国・下野国吹上10,000石
3. 位置 文献①には「字柳前ニ在リ」とあり、また、文献⑥では陣屋は梨ノ木公園の南西側とされる。柳前は今の五井駅一带に当たり、明治初めの陸軍迅速図では旧房総往還沿いから守永寺にかけて約100m四方の方形の区画が確認される。
4. 規模 旧道からの「引込み道」があり、「土塁、空堀（または水濠）に囲まれた方形単郭で藩主居館と地方役所、藏地、稻荷社、藩士武家屋敷、長屋などが置かれた」（文献⑤）とされるが、現在周辺一帯は五井駅と駅前の市街化により旧状はまったく窺えない。梨ノ木公園は旧五井小学校跡地であり、同校は明治17年に龍善院と千光院の南北に分かれて開校していたものを統合して開校したという（文献⑥）。なお、文献①では「大約方一町平坦ニシテ今田圃タリ」とする。
5. 歴史 ①松平家信は形原松平氏の系統であり、天正18（1580）年、「関東にいらせ給ひ、所領を上総国五位に移され、加恩ありて五千石を領」したが（『寛政重修諸家譜』）、慶長6（1601）年、五井を改めて本領形原に移ったので、五井に在ったのは僅か11年にすぎない。五井守永寺に家信生母と伝えられる長恩院殿の宝篋印塔があるが、塔そのものは慶長期より下の17世紀も後半の所産である。なお、子の康信はこの五井で生まれている。②神尾氏は家康の愛妾阿茶の局の前夫との間の系統で、久宗—守勝と継ぎ、守勝代に五井に陣屋を構えたとされる（3,000石）。墓所は深川雲光院（雲光院は阿茶の局の法号）である。③有馬氏倫は、将軍吉宗の御用取次として権力を振るい、享保11（1726）年には10,000石の大名となった。伊勢西條に陣屋を構え、このとき五井周辺も与えられたが、天明元（1781）年、4代後の氏恕（うじよし）のとき陣屋を五井に移した。以後、氏郁まで、計59年間、五井周辺6か村約4千石を領した。天保13（1842）年、幕末の海防対策の故か、氏郁の代に至って下野国吹上に移される（吹上陣屋）。五井陣屋の組織は明らかではないが、小頭2名の任命書の内容は明らかになっている（文献③）。
6. 関連文献  
①小沢治郎左衛門 1889『上総町邨誌』  
②千葉県 1961『千葉県史料』近世編・上総国下  
③市原市 1986『市原市史』中巻  
④三枝光雄 1995「柳前」『上総市原 第9号』



第64図 五井陣屋の位置



⑤山岸弘明 2001 市原領主の研究\*第2集『市原にある大名旗本の墓』

⑥山岸弘明 2005「鶴牧城と五井陣屋 市原の近世城郭」『平成17年度 歴史散歩資料 市原市五井・姉崎地区の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会

### 7. 関連資料

①五井守永寺伝松平家信母供養塔銘文（塔身部三面に阿弥陀三尊）

宝篋印塔基礎部正面「長恩院殿心誉理安大姉」

同右側面 「慶長十三戊申年」

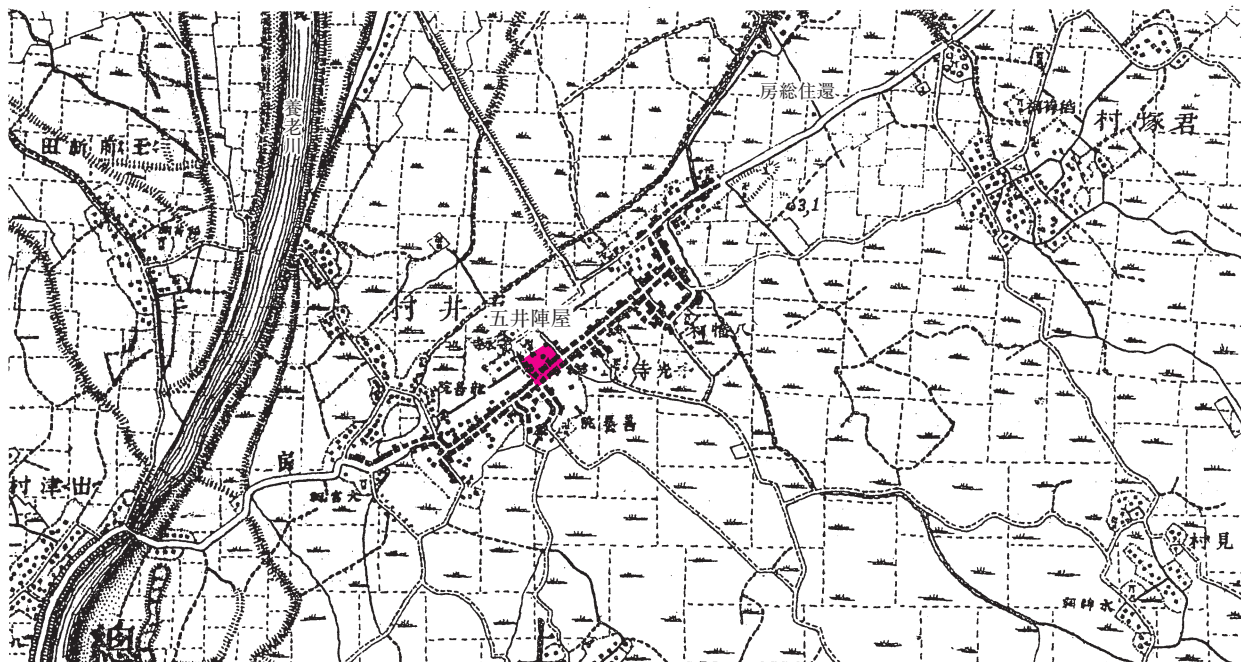
同左側面 「正月十三日」



図版60 守永寺から陣屋跡方面を見る



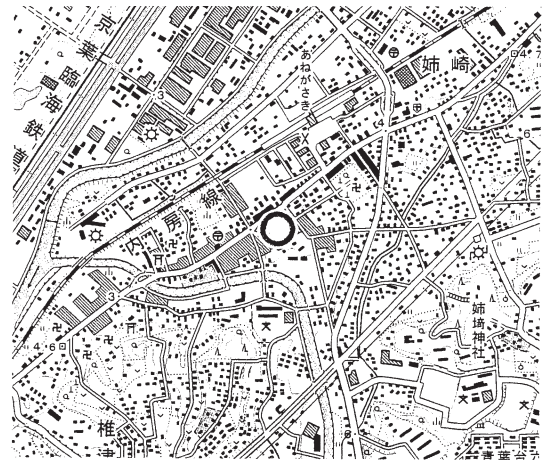
図版61 守永寺内松平定信母石塔



第65図 五井陣屋跡旧状（明治16年陸軍迅速図）

9. <sup>あねさき</sup>【姉崎陣屋】（大名陣屋）市原市姉崎内／上総国市原郡姉崎村

1. 当主 松平忠昌…直政 <sup>ただまさ</sup> <sup>なおまさ</sup>
2. 封地 慶長12（1607）年：上総国市原郡内10,000石～元和元（1615）年：常陸国下妻30,000石一（中断）一元和5（1619）年：20,000石～寛永元（1624）年：50,000石越前大野
3. 位置 不明ながら、椎津城跡付近から海岸線に並行して走る砂丘線上であろうか。この線上には日蓮宗妙経寺があるが、霊園造成に伴う調査では該期の遺構らしきものは確認されていない。



第66図 姉崎陣屋の位置

その西約200m行ったところで、旧道がかつて直角に曲がっており、約200m四方の方形の区画が確認される（明治初め陸軍迅速図）。あるいはこの一角が該当しようか。

4. 規模 不明。
5. 歴史 徳川家康の子、結城秀康の二男忠昌（幼名虎松丸）は、慶長12年に姉崎に10,000石を与えられた。資料①には「其年中江戸表へ下向被致台徳院様御目見被仰付采地として上総国姉ヶ崎と申所に於て一万石被下置本多佐渡守殿へ介抱之儀被仰付」とみえる。「介抱」とは慶長期に本多氏（正信・正純）が八幡周辺を所領としていたことと関連するのであろう（文献②・③）。恐らく、忠昌の家臣による陣屋支配がなされたと思われるが、それに本多氏がどう関わっていたかはわからない。元和元（1615）年、20,000石を加増され、常陸下妻へ封じられ、10年後の寛永元（1624）年に宗家の越前松平家（福井）を継いだ。直政は忠昌の弟で、越前大野木元に於いて10,000石を領していたが（資料③）、元和5年、兄の旧領姉崎に入封した。5年後の寛永元年、長兄忠直の旧領の内、30,000石を与えられ、旧地越前大野に復した。両者の姉崎在封期間は併せて12年半であった。

6. 関連文献

- ①市原市 1992『市原市史』資料集近世編 1
- ②市原市 1998『市原市史』資料編近世編 2
- ③山岸弘明 2008『平成20年度八幡公民館主催事業「八幡史学館」①』

7. 関連資料

- ①「落穂集」（『改訂史籍集覧』第十冊 臨川書店）
- ②「出雲松平氏烈士録」（国立史料館所蔵松平家文書／文献1）
- ③「諸侯年表」（内閣文庫蔵／新田完三編 1984）



第67図 姉崎旧状（明治16年陸軍迅速図）

10. 【鶴牧陣屋】(大名陣屋) 市原市椎津字鶴牧ほか／上

総国市原郡椎津村

1. 当主 水野忠韶—忠実—忠順

2. 封地 文政10(1827)年：丹波・上総国内(市原郡内ほか)15,000石～明治4(1871)年

3. 位置 現姉崎小学校の地。境川と正坊山に挟まれた平地。鶴牧の由来は江戸屋敷の所在地(早稲田鶴巻町)に因むと言われてきたが、近年ではそもそも鶴巻町に藩邸はなく、単に佳字を充てたという見解もある(文献③)。

4. 規模 文献①には、「面積一万六千九百三十九坪」とある。近代の見取図有り。

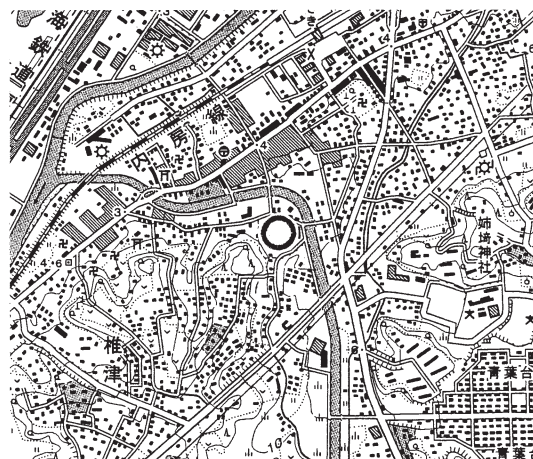
5. 歴史 水野家は家康の生母於大の方の兄忠清の系統で、始祖忠増は松本城主水野忠清の4男であった。二代忠位から大名となり、3代忠韶が若年寄中に城主格となる。陣屋建設の経緯は資料②に拠れば、「(文政10年)八月廿一日 一此度上総於椎津村ニ御陣屋御居所地御拝領ニ付、…同九月廿日 一去々酉年御城主格被為蒙仰、猶又此度御願之通上総ニおゐて御陣屋鋪地御拝領被遊候…、同十一月廿六日 …一椎津御居城銘目御唱替之儀、鶴牧と以来唱候様…、(文政11年)十二月九日 一鶴牧御居所御御普請ニ付、当御領分村々より高役金差出候処、右場所御外構其外御普請出来ニ付、」とある。慶応4(1868)年、五井村戦争で外郭が焼失する。明治7年、建物は競売に付される。藩校は修成館といい、建坪35坪であった。明治3年姉崎海岸に塩田を開き、翌7年までに2,000石を生産する。菩提寺は江戸小石川伝通院塔頭真珠院であった。

6. 関連文献

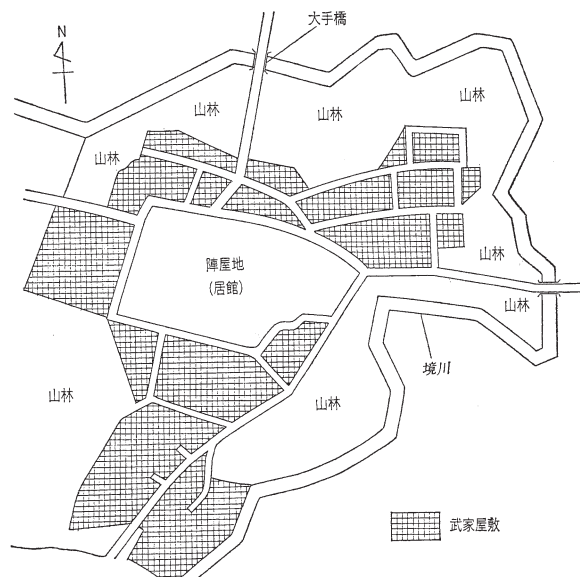
- ①千葉県 1919『千葉縣誌』巻下
- ②市原市 1986『市原市史』中巻
- ③山岸弘明 2005「鶴牧城と五井陣屋 市原の近世城郭」『平成17年度 歴史散歩資料 市原市五井・姉崎地区の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会

7. 関連資料

- ①鶴牧陣屋見取図(文献②)
- ②『鶴牧藩日記』(古西義麿編 1972 静文堂出版)



第68図 鶴牧陣屋の位置

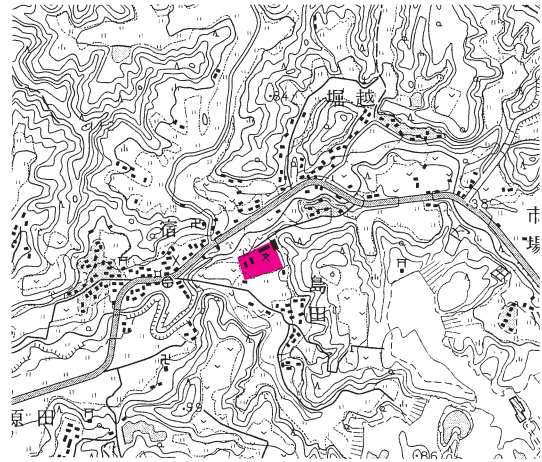


第69図 鶴牧陣屋見取図(資料①)

11. 【内田陣屋】（大名陣屋）市原市宿字陣屋ほか／上総国市原郡内田村

1. 当主 伊丹康勝—勝重—勝友—勝房—政勝—正広—正文—勝晃—（某）—為次郎—秀太郎
2. 封地 寛永末～慶安3年の間（1630代～50年代）：甲斐・武蔵・上総国市原郡ほか12,600石余～明治元（1868）年
3. 位置 文献①には「字根田ニ在リ旧幕臣伊丹氏ノ陣屋ヲ置キシ所タリ明治十五年壬午田地及小学校ノ敷地ト為ル」とあり、現在の内田小学校一帯が該当する。南側に丘陵が連なり、その南側山麓部の低地が跡地である。
4. 規模 規模は不明ながら、小学校の東側には土塁が遺存しており、これが陣屋の遺構とすれば地形条件を加味して凡そ南北70m、東西130m程の規模となる。明治初期まで建物が存在していたようであるが、その後小学校用地となった。
5. 歴史 伊丹氏は今川氏次いで武田氏に仕え、後に徳川氏の家臣となった。康勝代に大名となり、寛永末～慶安3年の間に甲斐、武蔵、上総市原郡ほか12,600石余を領した。この内、市原郡2,600石余を康勝の嫡子勝長が相続時（承応2年：1653）に弟勝重に分けたのが市原伊丹氏の始まりである。一応康勝代から記したが、正確には勝重代とすべきかもしれない。
6. 関連文献

①小沢治郎左衛門 1889『上総町郷誌』



第70図 内田陣屋の位置



図版62 内田陣屋跡遠景（東から）

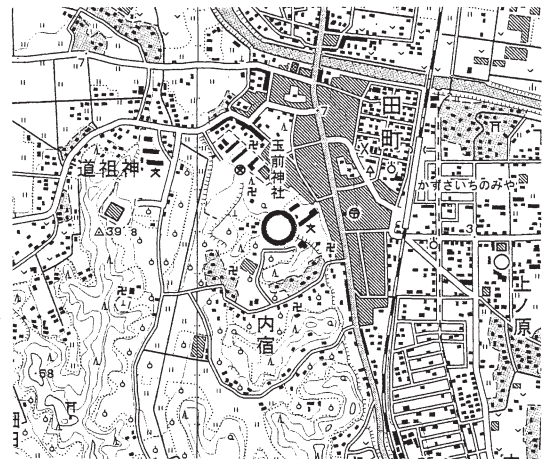


図版63 陣屋跡西側土塁

12. 【一宮陣屋】（旗本陣屋・大名陣屋）長生郡一宮町字

陣屋・城之内ほか／上総国長柄郡一宮本郷村

1. 当主 ①堀親興<sup>ちかおき</sup>  
②加納久儔<sup>ひさとも</sup>—久徴<sup>ひさあきら</sup>—久恒<sup>ひさつね</sup>—久宣<sup>ひさよし</sup>
2. 封地 ①寛文6（1666）年：上総国長柄郡内3,000石～元禄16（1703）年：断絶  
②享保11（1726）年：伊勢・下総・上総国内（長柄郡内）10,000石～明治4（1871）年
3. 位置 堀氏の陣屋は資料②に見える享保元年に高入された「御陣屋畑 牢屋畑」の記載から、字陣屋地と推測される。また、加納氏の陣屋は



第71図 一宮陣屋の位置

一般的に文政9（1826）年に伊勢八田から移したとされるが、資料①には現一宮小の地に「御陣屋地」の記載があり、既に上総領支配のための陣屋が置かれていたと思われる。

4. 規模 堀氏時代の規模は不明ながら、観明寺門前には沢潟文（堀氏家紋）の付いた門の建造物が現存する。既に万石以上となっていた加納氏による文政9年の「陣屋建設」は、陣屋移転に伴い、中世城址を陣屋構えとしたものと思われ、内宿側に表門、観明寺南側に裏門を設けたが、従来の陣屋地もそのまま維持したものと思われる。

5. 歴史 ①堀親興の祖父親良は越前北庄城主であった堀秀政の二男に当たり、親興は「寛文六年…那須郡の采地を上総国一宮領にかへ」たまわったが（「寛政重修諸家譜」）、元禄16（1703）年、無嗣断絶となった。②加納氏は久利代に徳川頼宣に臣従し、紀伊家に仕えた。孫の久通代に吉宗の將軍就任に伴い、幕臣となる。享保11（1726）年、1万石となり伊勢八田に入封し、以後、幕政の中樞に参画し、次の久徴は講武所総裁、奏者番、若年寄となった。上総一宮に陣屋を移したのは、文政9（1826）年の久儔<sup>ひさとも</sup>代とされている。明治2年に陣屋外の廃寺跡に校舎を建て崇文館（学問・武術）と名付ける。明治5年廃校。

6. 関連文献

- ①一宮町 1969『一宮町史』  
②上智大学史学会 1968『東上総の社会と文化』

7. 関連資料

- ①文政8年「城之内惣田畑絵図」（一宮町教育委員会蔵）  
②天保14年「一宮本郷村村鑑明細帳」（一宮町史編集室 1964『一宮町史資料（一）』）



図版64 一宮陣屋跡現状

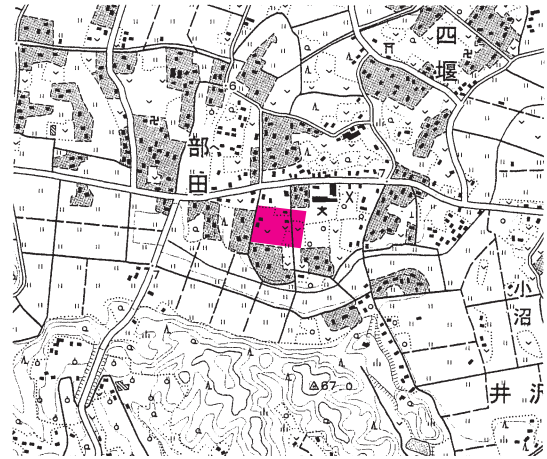


図版65 観明寺表門

13. 【中滝陣屋】（忍藩出張陣屋・旗本陣屋）いすみ市中

滝字陳屋ほか／上総国夷隅郡部田村

1. 当主 阿部正次—正能・正明—正府—正韶—正章—  
正行—正信—（大学）—大学—詮吉郎
2. 封地 寛文11（1671）年：武蔵・相模・上野・上総  
国内（夷隅郡内）90,000石（この内夷隅郡内  
10,000石）～明治元（1868）年
3. 位置 中根小学校南西約100mの地。
4. 規模 約80m四方の大きさで、現在東西が道、南北  
が溝で区画されており、主に畑地である。
5. 歴史 阿部氏は徳川政権譜代の名門で、なかでも正



第72図 中滝陣屋の位置

次はその宗家筋に当たる。元和3（1617）年に武蔵鳩ヶ谷から大多喜へ移った正次は僅か2年後の同5年に小田原へ転封されたが、夷隅郡内の所領はそのまま維持されたようである。約19年後の寛永15（1638）年、孫の正令（正能）が夷隅郡内1万石を分知され大多喜へ入封した。寛文11年、正令は一族の忍城主阿部氏の家督を継ぐことになり、同じ一族の阿部正春が代わって16,000石で大多喜へ入った。しかし、正令の10,000石（中滝村他8か村）は忍領として残された。陣屋は恐らくこれを契機として建てられた可能性がある。延宝5（1677）年、正令の二男正明は父の遺領である夷隅郡内中滝村ほか5か村内5,000石を与えられ、以後旗本陣屋として維持された。

6. 関連文献

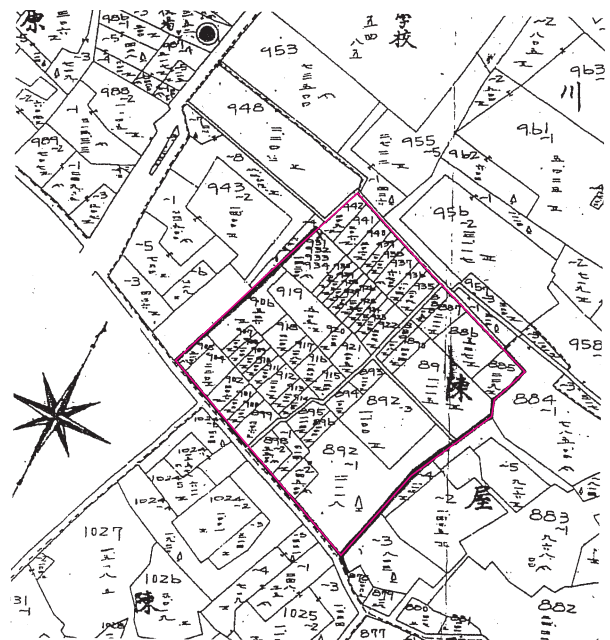
- ①岬町 1983『岬町史』
- ②大原町 1991『大原町史』史料集Ⅲ
- ③大多喜町 1991『大多喜町史』
- ④大原町 1993『大原町史』通史編

7. 関連資料

- ①年代不明「中滝領諸色留記」（文献①）



図版66 中滝陣屋跡近景



第73図 中滝陣屋地籍図（昭和12年土地宝典）

14. 【<sup>かりや</sup>苧谷陣屋】（旗本陣屋） いすみ市苧谷字南川淵／

上総国夷隅郡苧谷村

1. 当主 堀直之<sup>なおゆき</sup>—直景<sup>なおかげ</sup>—直良<sup>なおよし</sup>

2. 封地 寛永10（1633）年：越後・上総国内（夷隅・市原・埴生・長柄郡内）9,500石～寛文8（1668）年：越後・武蔵・下総・上総国内（夷隅・市原・埴生・長柄郡内）10,000石上総国八幡

3. 位置 文献①には「刈谷陣屋址 字南川淵ニ在リ」と記す。現在のいすみ鉄道苧谷駅南東の地に当たり、夷隅川が南側を大きく湾曲しながら巡っている。

4. 規模 現在一面の水田となっており、耕地整理が完了していることもあって不明である。

5. 歴史 堀氏は美濃齊藤氏、尾張織田氏次いで豊臣氏に仕え、堀 秀政を始め大大名を輩出した名門である。直之は越後国三条城主堀直政の五男で、將軍秀忠に仕え、元和2（1616）年に越後沼垂郡において5,500石を与えられ椎谷を居所とした。寛永10（1633）年、上総国夷隅郡ほか4郡4,000石を加増され、この時点で夷隅郡苧谷を居所とした。嫡男直景は父の死とともに封を継ぎ、自らの領地を合わせ10,000石（弟直氏に1,500石分割）の大名に列した。嫡男直良は寛文8（1668）年の襲封時に市原郡八幡に移り、陣屋を廃した。なお、文献①には「家臣榎林虎英ヲシテ之ニ居守セシム」とあるので、榎林氏が代官としてその任に当たったものであろうか。

6. 関連文献

①小沢治郎左衛門 1889『上総町郷誌』

7. 関連資料（特になし）



第74図 苧谷陣屋の位置



図版67 苧谷陣屋跡遠景

15. 【小佐部（伊南）陣屋】（大多喜藩伊南領出張陣屋）

いすみ市大原小佐部ほか／上総国夷隅郡寄瀬村

1. 当主 松平正久—正貞—正温—正升—正路—正敬—  
正義—正和—正質

2. 封地 元禄16（1703）年：三河・大和・上総国内（夷隅郡内）20,000石～明治4（1871）年

3. 位置 JR大原駅南東約600mの地で、国道128号線が南北に縦貫する。

4. 規模 地籍図等から、凡そ東西南北100m程の範囲と推測される。

5. 歴史 松平正久は幕府代官大河内秀綱の二男で、長沢松平家に入って松平を称した。幼少より家康に仕え、近習出頭人として頭角を現し寛永2（1625）年に22,000石の大名となった。元禄16（1703）年、上総国大多喜に入封したが、伊南領約8,500石の陣屋が直ぐに設置されたかどうかはわからない。正久以降、代を継ぎ、正質に至って廃藩置県を迎えるが、この間約170年である。寛政期の資料（資料①）には丸に伊の代官と記された窪田氏（4石2人扶持足高9俵）や多田野氏（3石2人扶持足高7俵）の名が見えるが、彼らが伊南代官に当たるのであろう。また、安政期の資料（資料②）には、「寄瀬村 郡奉行所 代官所」とみえる。なお、三河領には小牧陣屋が置かれた。

6. 関連文献

①大多喜町 1991『大多喜町史』大多喜町

②大原町史 1991『大原町史』史料集Ⅲ

7. 関連資料

①寛政10年「大多喜藩家中系譜」（文献①）

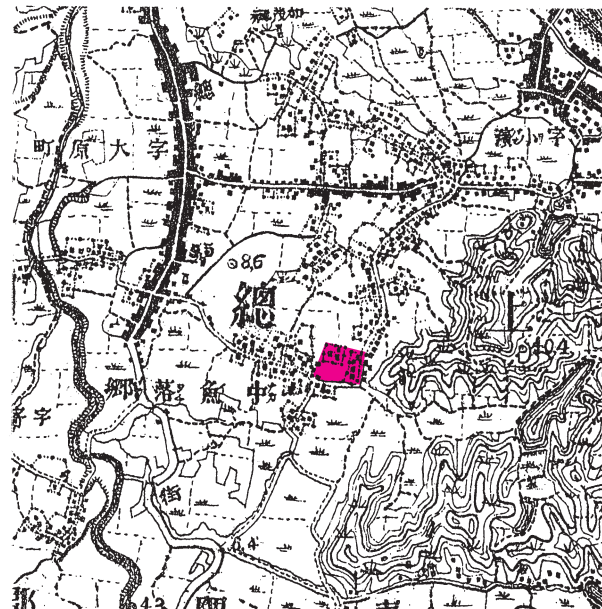
②安政4年御陣屋出頭命令書（文献②）



第75図 小佐部陣屋の位置



図版68 小佐部陣屋跡（小佐部区民センター）近景



第76図 小佐部陣屋跡旧状（明治16年陸軍迅速図）



16. 【勝浦陣屋】<sup>かつら</sup>1（旗本陣屋—大名陣屋）勝浦市墨名  
 字庚申山・串浜新田字内台ほか／上総国夷隅  
 郡勝浦村・串浜村

1. 当主 植村泰忠—<sup>やすかつ</sup>泰勝—<sup>やすとも</sup>泰朝—<sup>ただとも</sup>忠朝—<sup>まさとも</sup>正朝—<sup>つねとも</sup>恒朝
2. 封地 天正18（1590）年：上総国夷隅郡内3,000石  
 ～宝暦元（1751）年：廃藩
3. 位置 当初は勝浦城に入り、後に現勝浦小学校の墨  
 名庚申山次いで串浜新田内台の坂之上陣屋に  
 移った。「上総町郷誌」には「植村氏館址東  
 方字内台ニ在り東北西ノ三方丘陵ヲ負ヒ東南  
 勝浦市街ヲ俯瞰シ西南勝浦湾ヲ一望ス」とあ  
 る。
4. 規模 坂之上（内台）陣屋については、現状の見取  
 図（文献③）があるが、庚申山については不  
 明である。

5. 歴史 「寛政重修諸家譜」には泰忠代のこととして、  
 「上総国夷隅郡のうちにをいて三千石を賜ふ。  
 …（慶長）六年又夷隅郡のうちにをいて二千  
 石の加恩あり。すべて五千石を知行す。…法  
 名傳心。今の呈譜轉心不覚采地勝浦の覚翁寺  
 に葬」とある。しかし、泰勝の法名が覚翁で  
 あること、覚翁寺の泰忠の石塔はかつて勝浦

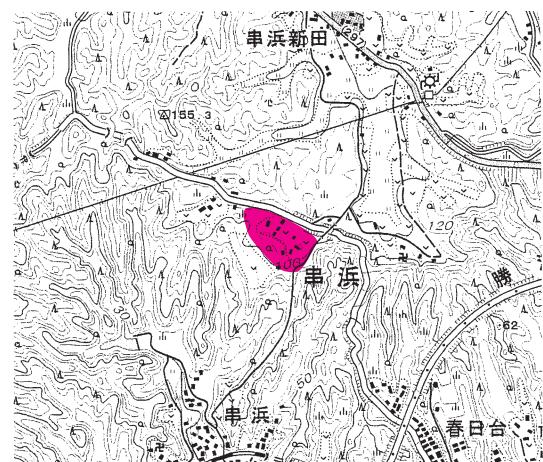
城内の新地ヶ台にあったことから、後に移されたものであろう。当初は大多喜城の本多忠勝の  
 与力として勝浦へ入ったが、忠朝代の天和2（1682）年には大名（11,000石：上総国夷隅・市  
 原、安房・近江・丹波国内）となる。しかし、恒朝代の宝暦元（1751）年、分家の事件への対  
 処を問われ廃藩となる。在地支配の役人としては、児安、関、加藤、貝塚の諸氏が確認される。  
 また、新官覚翁寺には泰朝～正朝3代の大形の宝篋印塔が現存する。なお、大岡氏時代には遠  
 見番所として使われたようで（文政10年岩槻藩報告に串浜村遠見番所と見える：資料③）、「坂  
 之上御陣屋」詰の藩士5名や小使若干名の存在が知られる（資料②）。

6. 関連文献

- ①引田作蔵 1970『私説 勝浦史』
- ②岩槻市 1981『岩槻市史』近世史料編Ⅲ
- ③千葉県教育委員会 1996『千葉県中近世城館  
 跡詳細分布調査報告書—上総・安房編—』
- ④勝浦市 2004『勝浦市史』史料編近世
- ⑤勝浦市 2006『勝浦市史』通史編



第77図 勝浦陣屋の位置



第78図 坂之上（内台）陣屋の位置



図版69 覚翁寺植村氏墓所

7. 関連資料

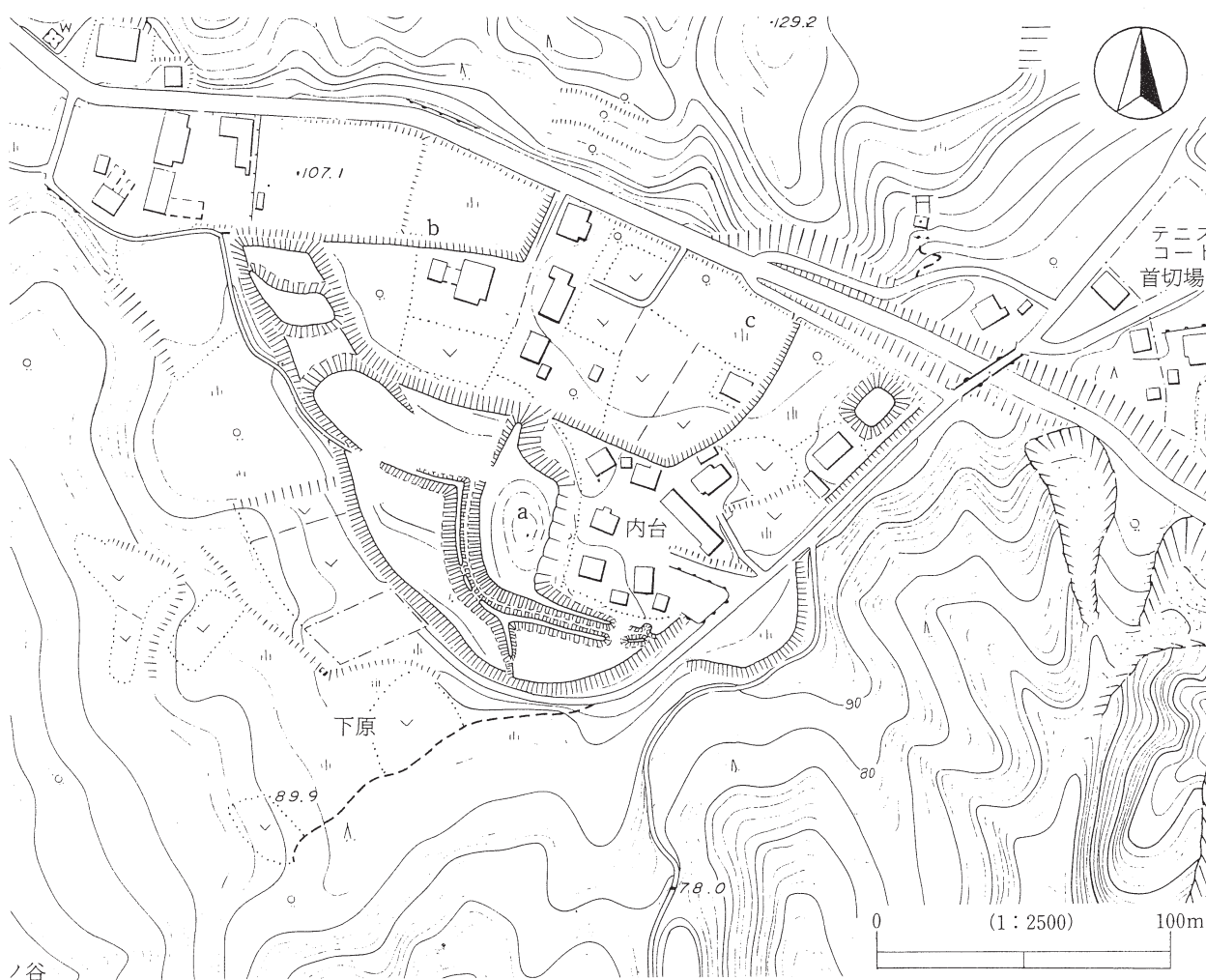
- ①「上総国夷隅郡七浜大絵図」(久我家文書)
- ②「総房江勤番中日記」(文献⑤)
- ③『通航一覧統輯』第五卷(箭内健次編 1973)



図版70 勝浦城跡新地ヶ台現状



図版71 坂之上陣屋跡近景



第79図 坂之上陣屋跡見取図(文献③)

17. <sup>かつら</sup>【勝浦陣屋】2 (大名陣屋) 勝浦市墨名字ガケ下ほか／上総国夷隅郡墨名村

1. 当主 大岡忠光—<sup>ただみつ</sup>忠喜—<sup>ただよし</sup>忠要—<sup>ただとし</sup>忠烈—<sup>ただやす</sup>忠正—<sup>ただまさ</sup>忠固—<sup>ただかた</sup>忠恕—<sup>ただのり</sup>忠貫

2. 封地 宝暦元(1751)年：上総・安房国10,000石～明治4(1871)年

3. 位置 文献①には「字ガケノ下ニ在リ此地…武蔵国岩槻城主大岡氏…其初メ役所ヲ勝浦町ニ置ク天明元年辛丑陣屋ヲ此ニ構造シ勝浦陣屋ト称ス」とある。ガケノ下とは勝浦小学校西側の地に相当し、文献⑤では墨名児童館辺りに比定している。何れにせよ小学校から児童館ないし商工会館辺りが想定される。

4. 規模 規模については不明である。

5. 歴史 大岡氏は忠光代に家重の小姓として頭角を現し、徐々に加増され、宝暦元(1751)年に1万石の大名となった。「恩栄録」には「宝暦元年 加五千石 上総勝浦 大岡出雲守忠光十二月七日合一万石御側用人」と見えるが、勝浦の何処かまでは記載がない。忠光は宝暦4(1754)年に5,000石(上総・安房国内)、同6年にはさらに5,000石(武蔵国内)を加増され20,000石となったところで岩槻城に移ったが、勝浦領は維持された。なお、房総分領の支配は郡奉行・代官によって行われ、その人名については既に資料①他で知られ、また文献⑤にまとめられている。

6. 関連文献

- ①小沢治郎左衛門 1889『上総国町郷誌』
- ②藤野 保校訂 1970『恩栄録・廃絶録』
- ③引田作蔵 1970『私説 勝浦史』
- ④勝浦市 2004『勝浦市史』資料編近世
- ⑤勝浦市 2006『勝浦市史』通史編

7. 関連資料

- ①「郡奉行御代官名簿」(吉野家文書／文献⑤)



第80図 勝浦(墨名)陣屋の位置



図版72 勝浦商工会館付近近景



図版73 勝浦小学校現状

18. 【貝淵陣屋】(大名陣屋) 木更津市貝淵字狭間ほか／上

総国望陀郡貝淵村

1. 当主 ①林忠英—忠旭  
②松平(滝脇)信敏
2. 封地 ①文政8(1825)年：上総国望陀郡内ほか  
10,000石～嘉永3年(1850)：同郡請西移転  
②明治2(1869)年：上総国内(望陀郡・周准郡・市原郡)10,000石～明治4(1871)年
3. 位置 木更津市民会館約250m南東の住宅地。現在陣屋跡の石碑が建てられている。
4. 規模 陣屋地は現在住宅地・道路・公園敷地となっており、旧状はまったく窺えない。その面積は1,500坪また2,500坪と諸書によって一定しないが、明治初めの陸軍迅速図では約1,500坪ほどの長方形の区画が読みとれる。
5. 歴史 ①林氏は小笠原氏支族で、筑摩郡林郷を名字の地とした。戦国期に徳川氏に仕え、江戸時代に200石の旗本となった。忠英代の天明元(1781)年に家斉が将軍に就任するや、その小姓として寵愛された。文政8(1825)年には若年寄に進み、1万石の大名となり、上総貝淵へ入封し、さらにその後8,000石を加増されている。しかし、家斉死後、その反動から幕閣に疎まれ、「減知八千石一万二千石之内 上総貝淵 林肥後守忠英 四月十六日、故あって若年寄を免され、先に加え賜ふ内八千石を取られ、差扣べき旨仰をかふむり、七月□、隠居せしめられ」た(文献②)。忠英のあとは忠旭が継ぎ、天保14(1843)年には印旛沼堀割工事の一部を担当した(翌年水野忠邦失脚により中止)。4年後の嘉永3(1859)年、陣屋を近隣の請西間船台に移した。②上総国周准郡金ヶ崎に陣屋を置いていた松平信敏は明治2年3月に望陀郡に陣屋を移した。その理由は「金ヶ崎地理不便ノ故ヲ以テ桜井村へ陣屋相當度」(資料①)というものであった。藩庁・土屋敷が完成した明治4年に廃藩置県を迎えることとなった。通常、桜井陣屋として別途記載されるが、文献①には「林氏の貝淵陣屋址に藩庁を置き士卒の第宅は桜井村に設けしにより桜井藩と称せり」とある。貝淵と桜井は隣接する故で、今これに従う。なお、藩士は約100人程であった。また、藩校は時習館といった。

6. 関連文献

- ①君津郡教育会 1927『千葉県君津郡誌』下巻
- ②藤野 保校訂 1970『恩栄録・廃絶録』近藤出版社
- ③木更津市 1972『木更津市史』
- ④「桜井藩を偲ぶ①・②ゆかりの人々の対談」(平成2年『新千葉新聞』第12246号・第12263号)

7. 関連資料

- ①「桜井県歴史」(『千葉県史料』近代編明治初期1～3)



第81図 貝淵陣屋の位置

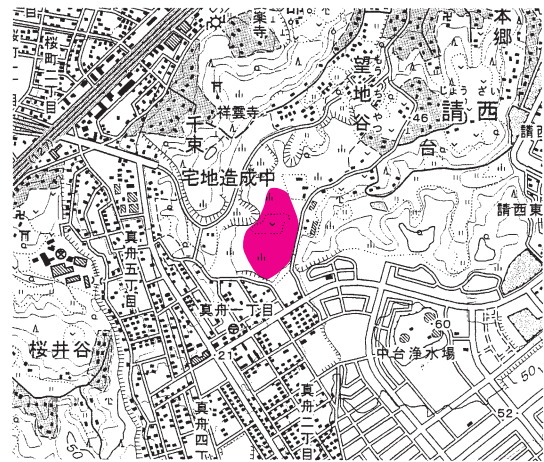


図版74 貝淵藩陣屋跡近景

19. 【真武根陣屋】（大名陣屋）木更津市請西字馬舟ほか

／上総国望陀郡請西村

1. 当主 林忠旭—忠交—忠崇  
ただあきら ただかた ただかさ
2. 封地 嘉永3（1850）年：上総国望陀郡内10,000石  
～明治元（1868）年廃藩
3. 位置 標高約50mの間船台地上、平成12年確認調査実施、測量図も作成（概念図提示）される。
4. 規模 文献⑨に従えば、南北600m、東西200m程の規模となるが、これは房総陣屋では突出した規模となり、地形条件を加味すればその半分位になろうか。台地自体が細長く入り組んだ



第82図 真武根陣屋の位置

- 地形を呈しており、それに規制されたあり方ながら、北側は東西南北の区画に沿っている。なお、陣屋自体は土手と溝によって複雑に区画された様相を示す。
5. 歴史 林氏は信濃小笠原氏の分流といわれ、戦国期に徳川氏に帰属した。家康に従い房総へ入った吉忠から数えて七代忠英ただふさのとき将軍家斉の側近として頭角を現し、若年寄に昇進して大名となった。その後、反動から不遇の時代もあったが、嘉永3（1850）年、忠旭代に貝淵から約1.5km南東の間船台に陣屋を移した。4年後の寅の歳（安政元年）に建具屋が「請西御陣屋御殿ノ間」の請負代金を受け取った旨の書面があるので、その前後には完成したものであろう（資料②）。安政元（1854）年、弟忠交は忠旭から家督を譲られたものの、伏見奉行在任中の慶応3（1867）年に没した。この間の慶応2年正月、伏見寺田屋に泊まった坂本龍馬を捕縛すべく指揮を執ったのが他ならぬこの忠交である。忠交の後には忠旭の末子忠崇が継いだ。忠崇は慶応4年の戊辰戦争に当たり、藩主でありながら、旧幕府遊撃隊の要請に自ら脱藩してこれに応じた。同年10月、転戦先の仙台で降伏したものの、領地は没収され、請西藩は消滅した。



図版75 真武根陣屋跡現状



図版76 真武根陣屋跡石碑と解説

6. 調査の概要

真武根陣屋は近世木更津湊から約2km程南東に入った標高約50mの字間船台の台地上に所在する。測量調査は昭和57年と63年に行われ、平成2年に測量図が公になった（文献⑥）。その成果に基づき外山信司

氏による概念図の作成と分析が行われた（文献⑦）。平成8・9、同12年にはその一部の発掘調査が行われ、それぞれ平成10年と13年に報告・分析（文献⑧・⑨、⑩）が行われ、その大まかな規模と構造が明らかになっている。

それによれば、陣屋の推定範囲は「南北370m、東西280m、面積約8,800㎡」ながら、南西台地上の土手部分や西側の通称「榊形」を含めれば倍の面積となるという。もちろんこれは陣屋本体のみならず付属する長屋や町場まで含めるかどうかに関わってくることから、現状ではそれを判断する資料に事欠いている状況といえる。

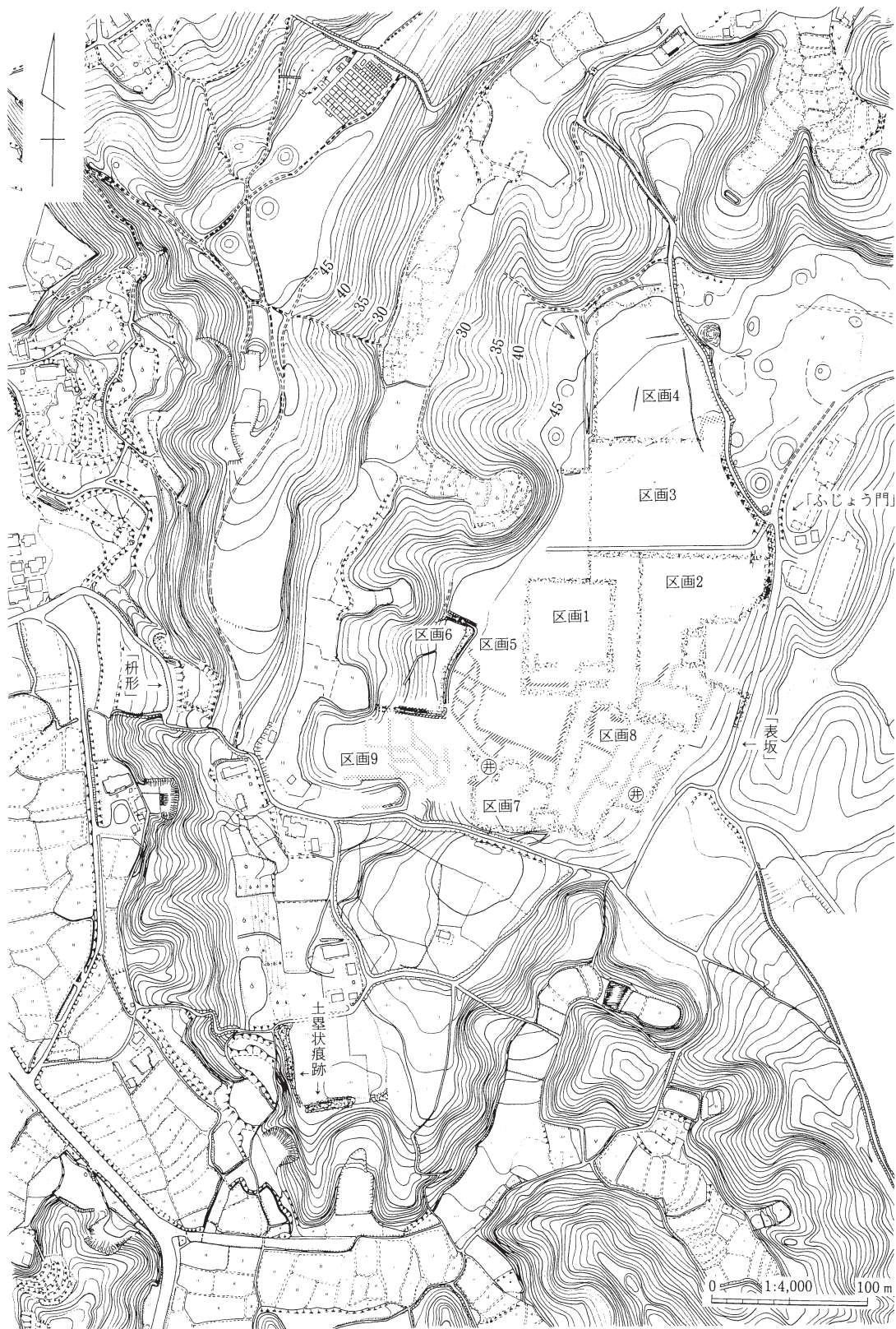
測量図・概念図（文献⑦・⑨）作成による大きな成果は、南西部大手口のルートとその沿道に小区画地を取り付く様子が土塁・溝の走り方から明らかになったことである。その一方、中央～北部における区画は単純かつ面積が広く好対照をなす。発掘調査は北部、南西部、南東部で行われたが、いずれも限定された範囲である。このなかでは、北部の瓦廃棄土坑と南東部小区内における生活感ある遺物（19世紀代の飲食・調理用陶器が主）が注目される。房総大名陣屋の一般的な構造からして、①御殿、②役所・蔵、③土屋敷、④長屋という四つのエリアが考えられるが、①が北側、②が中央、③が大手口両側というように想定されるものの、報告でも指摘されているようにその実態解明はまさに今後の調査如何にかかっている。

## 7. 関連文献

- ①改訂房総叢書刊行会編 19『明治戊辰房総戦乱記』『改訂房総叢書』第五巻
- ②木更津市 1952『木更津郷土誌』
- ③小島茂男 1975『幕末維新时期における関東譜代藩の研究』明德出版社
- ④小林康利 1982「龍溪寺境内林家墓標と林家由来」『さざなみ』23号
- ⑤林 勲 1988『林候家関係資料集』
- ⑥浜崎雅仁 1990『千束台遺跡群確認調査報告書』木更津市教育委員会
- ⑦千葉県教育委員会 1996『千葉県中近世城館跡分布調査報告書－上総・安房編－』
- ⑧矢野淳一 1998「塚原遺跡」『君津郡市文化財センター 年報15』君津郡市文化財センター  
・1999「真武根陣屋跡」『君津郡市文化財センター 年報16』君津郡市文化財センター
- ⑨稲葉昭智・矢野淳一 1998「幕末陣屋遺構の一例－木更津市請西真武根陣屋について－」『君津郡市文化財センター 研究紀要』Ⅷ 君津郡市文化財センター
- ⑩齊藤礼司郎 2001『平成12年度 木更津市内遺跡発掘調査報告書 真武根陣屋跡 中越遺跡 内屋敷遺跡』木更津市教育委員会

## 8. 関連資料

- ①「林家譜」（東大史料編纂所蔵）
- ②「真武根陣屋造営工費受領之証」（文献⑤）



地形図は、請西千束台土地区画整理組合・請西第一土地区画整理組合による事業開始前の地形測量図を合成し、更に木更津市発刊1:2,500地形図昭和42年版で補足した。土塁は、現状で遺存している部分と、米軍撮影航空写真（昭和22年）および地形測量図の判読から推定した部分を図示した。

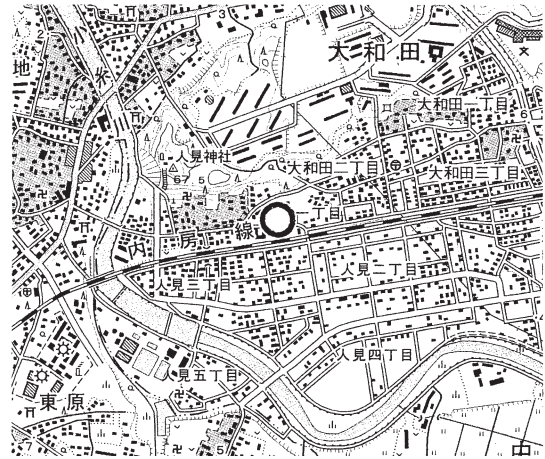
土塁
  段差
  溝
  井戸

区画3の一部・4・6・9は発掘調査が終了している。区画1～3の一部は、天地返しを受けており、試掘の結果、遺構の消滅が確認された。区画7南の道以南は、造成工事により消滅している。「」は、地元の通称。

第83図 真武根陣屋跡推定復元図（文献⑨）

20. <sup>ひとみ</sup>【人見陣屋】（旗本陣屋）君津市人見1丁目／上総国周准郡人見村

1. 当主 小笠原のぶもと信元—のぶもり信盛—ながずみ長住—ながなり長成—のぶち信用—のぶす信甫  
—のぶえき信編—のぶかた信賢—のぶよし信好—のぶもち信庸
2. 封地 天正18（1590）年：上総国周准郡内2,500石～明治元（1868）年
3. 位置 現周西幼稚園一帯の地で、北側は坂田の丘陵が控える低い段丘面。
4. 規模 凡そ東西80m、南北60m程になろうか。かつては堀の痕跡が残っていたという。
5. 歴史 小笠原氏は武田氏、次いで今川氏に従い、信



第84図 人見陣屋の位置

元の父廣重のとき家康に仕えた。「寛政重修諸家譜」には、天正18年、「上総国周准郡のうちにをいて二千五百石を賜ひ、…その後采地富津に住し、十七年七月二十八日彼地にをいて死す。年六十九。法名正珊。同国西川村の正珊寺に葬る。のち代々葬地とす。正珊寺はかつて信元が開基するところなり。」と見える。富津長秀寺には信元の母と室の石塔が、また、正珊寺は信元以降菩提寺となり、代々の石塔もあることから、陣屋もその近辺に営まれたのであろうが、その位置は定かでない。二代信盛は大阪兩度の陣に走水の番、三代長住は御船手頭を勤めた。小笠原氏の所領はその後一部望陀郡に及んだが、小糸川河口近くの村々に集中していた。幕末の文化7（1810）年、所領の富津村が幕府の海防対策のため白河藩に移ると、替地として大堀村内の地を与えられ、同10年に人見の山麓南側に陣屋を建設した。最後の信甫代には周准郡采地を下野国足利郡に移されている。なお、陣屋の役人は知行地に残された文書によって知ることが出来る（文献①）。

6. 関連文献

- ①君津市史 2001『君津市史』通史
- ②坂井 昭 2009「武家の墓石の形態と墓碑銘考－正珊寺の小笠原氏の墓石から－」『富津岬Ⅱ』

7. 関連資料

- ①小笠原氏陣屋敷絵図（守家文書／文献①）



図版77 人見陣屋跡近景



図版78 正珊寺小笠原家墓所



21. 【下湯江陣屋】（旗本陣屋）君津市下湯江字八崎ほか

／上総国周准郡下湯江村

1. 当主 赤松氏置—氏照—範恭—範主—恭富—範邑—  
のりよし 範善—のりひさ（範亀）—のりただ 範忠—のりちか 範静

2. 封地 文禄4（1595）年：上総国内（天羽郡・周准郡内）2,150石～明治元（1868）年

3. 位置 文献①には「下湯江の西方八崎に在り四隣平坦にして内堀等の跡を存せり」とある。小糸川下流の谷底平野中にあり、富津市との境界に位置し、北側は旧流路のなす低地に面する。通称殿山。

4. 規模 富津市との境界に土手が遺存しており、これが西側の境界とすれば、東西200m・南北100m程になろうか。なお、現地は自然堤防上の小高い砂丘地であり、低地ながら眺望に富む。

5. 歴史 始祖氏置は播磨守護赤松氏の系統で、家康の近習から出発し、文禄4（1595）年に上総国天羽・周准両郡のうちで2,500石余の地を与えられた。室は佐貫城主内藤家長の娘であった。氏置夫妻と氏照の石塔は現君津市貞元的最勝福寺にあり、板碑また唐破風型の大きな墓塔である。氏照以降連綿と継ぎ、範忠は外国奉行、範静は軍艦奉行を務めている。墓所はその後品川了真寺となった。なお、氏照の娘また家臣筋の石塔は下湯江法巖寺に現存する。

6. 関連文献

- ①君津郡教育会 1927『千葉県君津郡誌』下巻
- ②君津市 1997『君津市史』金石文編
- ③君津市 2001『君津市史』通史

7. 関連資料

- ①最勝福寺赤松氏置夫妻・氏照石塔銘文（文献③所収）



第85図 下湯江陣屋の位置



図版79 最勝福寺赤松氏置夫妻石塔



図版80 下湯江陣屋跡内部近景



図版81 下湯江陣屋跡北側段差

22. 【向郷陣屋】（前橋藩出張陣屋）君津市向郷字古陳屋

ほか／上総国周准郡向郷村

1. 当主 ①酒井忠清—忠挙—忠相—親愛—親本—忠恭  
②松平朝矩—直恒—直温—齊典

2. 封地 ①延宝8（1680）年：近江・相模・上野・上総国内（上総分領望陀郡内ほか20,000石）150,000石～延享3（1746）年：播磨国姫路  
②寛延2（1749）年：近江・武蔵国・相模・上野・相模・安房・上総国内（望陀郡内ほか）150,000石～文政10（1827）年

3. 位置 久留里から愛宕山へ至る市道脇の小高い段丘面。

4. 規模 現地は耕地整理が行われ、旧状は窺えないが、文献①では2反2畝14歩、②では、面積凡九百坪とある。

5. 歴史 ①酒井氏は徳川氏と祖を同じくする松平氏の分かれで、重忠の代に家康の関東移封に従い、武蔵川越城で1万石を与えられ、関ヶ原戦後には上野国前橋城に移った。二代忠世は將軍秀忠の側近として仕え、大老格に昇進し、同時に約120,000石にまで加増され、酒井家の基礎を築いた。4代が「下馬將軍」と呼ばれた忠清で、延宝8年に望陀郡を与えられたのが上総分領の始まりである。望陀郡上総分領は当初旧小櫃村から旧上総町に及ぶ約20,000石ほか（他に市原郡内）の地で、この分領支配のために陣屋が置かれた。陣屋の設置は後の記録に「去ル子丑兩年ニ酒井雅楽頭様御陣屋御用地ニ被召上候」（文献①）とあることから、酒井氏時代に設置されたことは確かながら、その実態などは不明である。②松平氏は家康次男結城秀康の五男直基を祖とし、朝矩は五代目に当たる。寛延2年に酒井氏と入れ替わりに姫路から前橋城に入ったが、酒井氏の旧領をほぼ引き継いだとされる。明和4（1767）年には武蔵川越に移り、以後幕末の慶応2（1866）年まで川越藩の上総分領支配は続けられたが、文政10年に三本松陣屋に移った。陣屋の定詰役人は郷目付・郷横目・山番・山横目などがあり、地元（上総）出身者が新たに登用され、上級の者は士分に取り立てられている（文献④）。

6. 関連文献

- ①森 覚蔵 1914『久留里藩制一斑』（『千葉県史料近世篇 久留里藩制一斑』千葉県 1990）  
②君津郡教育会 1927『千葉県君津郡誌』下巻  
③君津市 2001『君津市史』通史  
④川越市 1978『川越市史』資料集近世1

7. 関連資料（特になし）



第86図 向郷陣屋の位置



図版82 向郷陣屋跡近景

23. <sup>さんぼんまつ</sup>【三本松陣屋】（川越藩出張陣屋）君津市大戸見字三

本松ほか／上総国周淮郡松丘村

1. 当主 松平朝矩とものり—直恒なおつね—直温なおのぶ—齐典なりつね—典則つねのり—直侯なおよし—直克なおかつ

2. 封地 文政10（1827）年：上総国望陀郡・武蔵国・上野国・近江国約200,000石～明治元（1868）年

3. 位置 周囲を深い谷に囲まれた三本松公園北側、標高約110mの小高い丘陵上。

4. 規模 文献②では、旧松丘村役場跡を含めた約2,000坪で、「まわりに土手を築き上にカラタチの垣根を巡らし簡単な空堀もあった」という。何れにせよ地形や現況などからして、南北50m、東西150mを越えることはないと思われる。

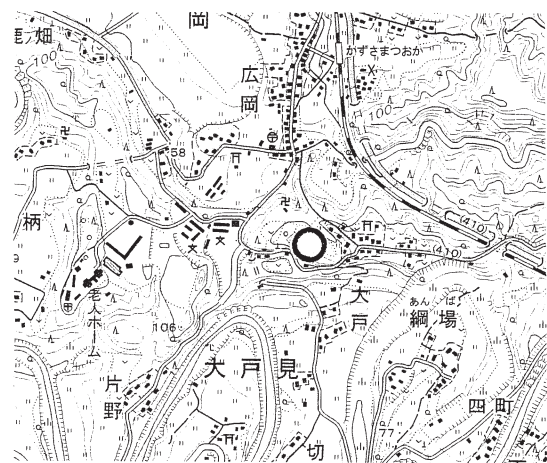
5. 歴史 向郷陣屋の項参照。なお、向郷から三本松への移転時期については、大正期の縣誌や郡誌では文政10年ではなく文化13（1816）年とする（「上総町郷誌」では文政8年とも）。陣屋詰の役人は小代官2ないし3名以下中間を含め、50～60名であった。その役職・姓名等は地元に残る資料（資料①）からも知ることが出来る。なお、川越藩上総分領は山村地帯ゆえに薪炭生産が盛んであったが、専売制をはじめとする収奪に陣屋役人との間で一揆に発展することもあった。

6. 関連文献

- ①千葉県 1919『千葉縣誌』巻下
- ②上総町 1969『上総町郷土史』
- ③鈴木 浩 1979「三本松陣屋」『呦々』第二号
- ④君津市 1991『君津市史』史料集Ⅰ 古代・中世近世Ⅰ
- ⑤池田宏樹 1995「上総山村の支配と村落－川越藩上総分領について－」『近世房総の社会と文化』
- ⑥君津市 2001『君津市史』通史

7. 関連資料

- ①「上総住居役名並びに勤年数調帳」（文献④）



第87図 三本松陣屋の位置



図版83 三本松陣屋土塁跡



図版84 三本松陣屋跡遠景

24. 【市場陣屋】(旗本陣屋) 君津市清和市場字陣屋畑ほか

か／上総国周淮郡市場村

1. 当主 曾根吉次—吉勝—喜次—長之—長友—長員—  
次武—次孝—次徳

2. 封地 寛永18(1641)年：武蔵・上総国内(望陀郡・周淮郡内) 3,000石～明治元(1868)年

3. 位置 中世秋元城跡北麓の地ながら、周囲の水田面を見下ろす小高い地(通称田中台)。

4. 規模 詳細は不明ながら、地形や現況などからすれば、南北70m、東西50m程か。

5. 歴史 甲斐国武田氏支流で、八代郡曾根村に住したこと

ことから曾根を称した。武田氏、今川氏、次いで徳川氏に仕え、吉次代に勘定奉行等を務めて頭角を現し、寛永18(1641)年に上総国周淮郡内ほかで3,000石を与えられた。吉勝・吉次は清和市場の妙喜寺を墓所とし、裏山に石塔が現存する。曾根氏は広大な上総山間部を地頭御林として領有し、木材や薪炭生産によって大きな利益をあげた。なお、在地支配は地元の名主階層である川俣氏や根岸氏を目付・代官として登用したが、その業務ないし心得については既に紹介されている(文献①)。中世秋元城北側の妙喜寺には曾根氏や根岸氏の石塔が裏山や境内墓地の一角に存在する。

6. 関連文献

- ①清和村誌編纂委員会 1976『清和村誌』
- ②君津市 1997『君津市史』金石文編
- ③君津市 2001『君津市史』通史

7. 関連資料

- ①妙喜寺曾根氏石塔銘文(文献②)



第88図 市場陣屋の位置



図版85 市場陣屋跡近景



図版86 妙喜寺裏山曾根氏墓所

25. <sup>いの</sup>【飯野陣屋】(大名陣屋) 富津市飯野字本丸・稲荷

口ほか／上総国周准郡飯野村

1. 当主 保科正貞—正景—正賢—正殷—正寿—正宣—  
正率—正徳—正丕—正益

2. 封地 慶安元(1648)年：近江・摂津・下総・安房・上総国内(望陀郡・周准郡内)17,000石～明治4(1871)年廃藩

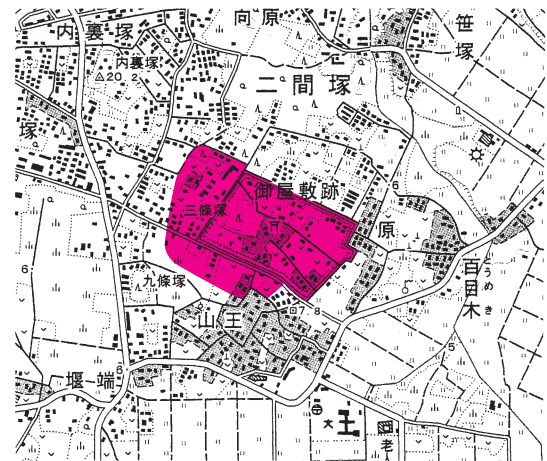
3. 位置 富津古墳群の一つである三条塚古墳とその東側一帯の地。

4. 規模 陣屋とはいえ、構造は城郭構えであり、本丸から三の丸に及ぶ凡そ東西430m、南北290mの多郭構造をなす。

5. 歴史 保科氏は甲斐武田氏次いで徳川氏に仕え、正貞代の慶安元(1648)年に上総・下総等旧領に加え摂津国で加増され、17,000石となった時点で陣屋を構えた。以後、幕末まで継続し、陣屋も維持された。弘化2(1845)年には青木村に見張番所を設置した。慶応2(1866)年、正益は若年寄に進み第二次長州戦争を指揮した。発掘調査は、周辺の内裏塚古墳群の調査で陣屋関連遺構や近世遺物が検出されたものも含むと、1981年以来部分的調査ながら20回以上、本丸・二の丸・三の丸内だけでも11か所程の地点が調査されている(第5章参照)。藩校明新館は明治維新前後に飯野字山王に建てられた。

6. 関連文献

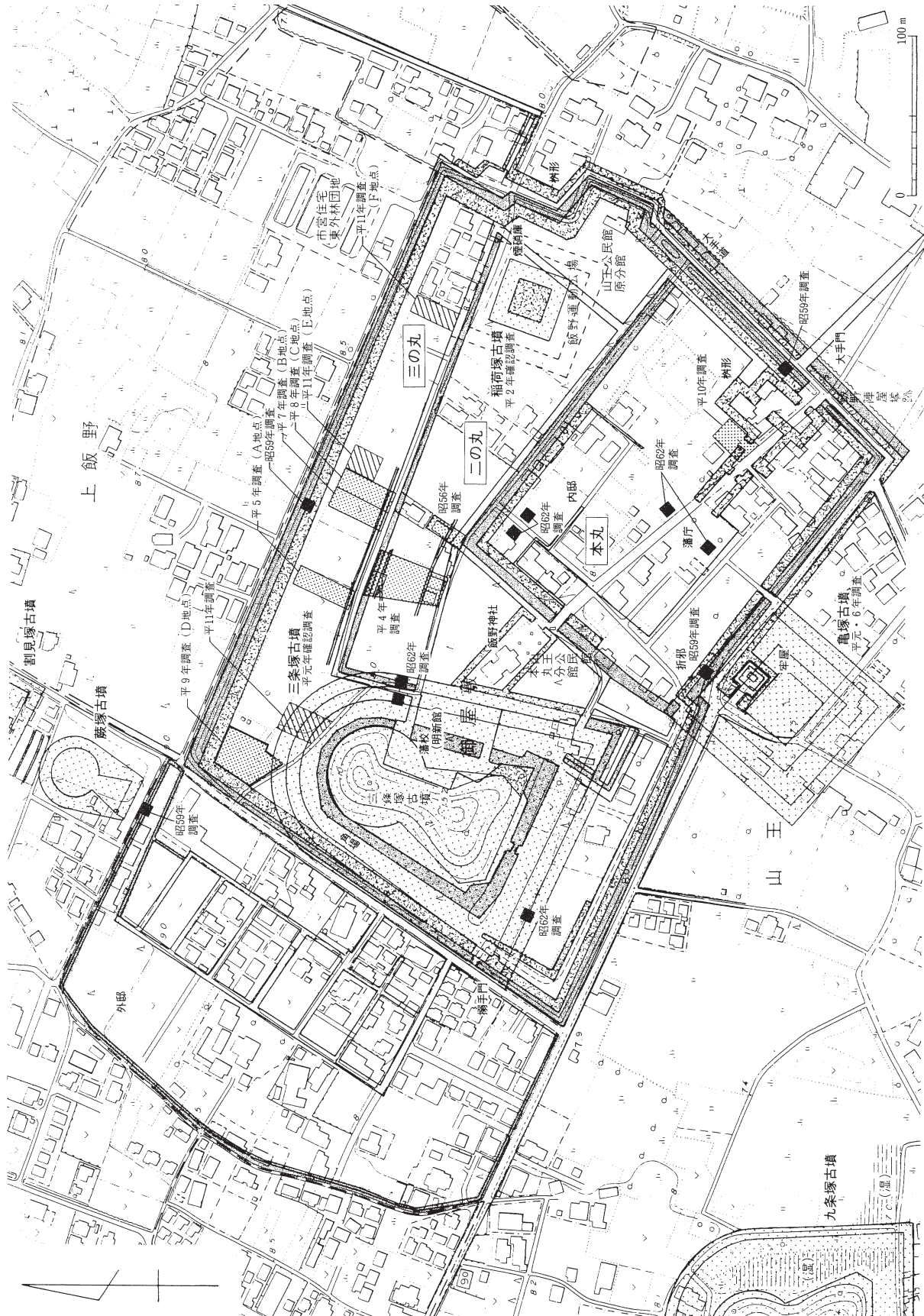
- ①千葉県企画部県民課県史編さん室編 1969『千葉県史料』近代編・明治初期2 千葉県
- ②富津市史編さん委員会編 1979・80『富津市史』史料集一・二
- ③千葉県教育委員会 1980『千葉県記念物実態調査報告書1—飯野陣屋濠跡』
- ④植竹好明 1981「飯野陣屋」『関東の城』小学館
- ⑤杉山林継 1982『千葉県富津市 飯野陣屋 稲荷口遺跡調査報告』稲荷口遺跡調査会
- ⑥小沢 洋 1985『千葉県富津市 飯野陣屋濠跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
- ⑦鳴田浩司 1987『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集』千葉県教育委員会
- ⑧桐村修司ほか 1990『千葉県富津市 南口遺跡』(財)君津郡市文化財センター
- ⑨小沢 洋 1990『千葉県富津市 三条塚古墳』(財)君津郡市文化財センター
- ⑩鳴田浩司 1990『飯野陣屋跡出土遺物の新知見(1)』『研究連絡誌』第30号 (財)千葉県文化財センター
- ⑪黒澤 聡 1993『平成4年度 富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
- ⑫諸墨知義 1993『千葉県富津市 飯野陣屋二の丸跡』(財)君津郡市文化財センター
- ⑬中能 隆 1994『平成5年度 富津市内遺跡発掘調査報告書』(財)君津郡市文化財センター
- ⑭諸墨知義 1996『平成7年度 富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
- ⑮諸墨知義 1997『平成8年度 富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
- ⑯八田英夫 1997「飯野陣屋について」『西上総文化会報』第57号 西上総文化会
- ⑰諸墨知義ほか 1998『平成9年度—千葉県富津市—富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
- ⑱諸墨知義 1999『平成10年度—千葉県富津市—富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会
- ⑲諸墨知義 2000『平成11年度—千葉県富津市—富津市内遺跡発掘調査報告書』富津市教育委員会



第89図 飯野陣屋の位置

7. 関連資料

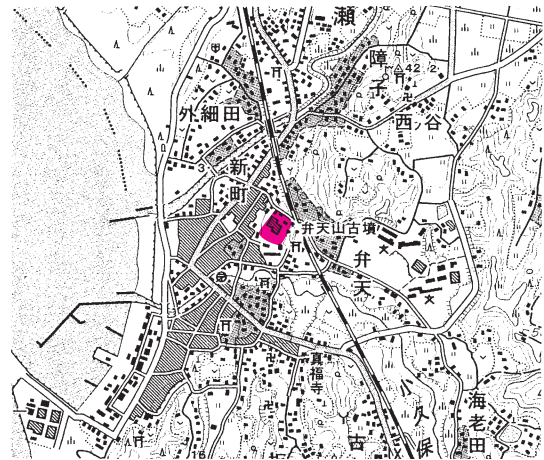
- ①「保科家文書」(国立史料館蔵)
- ②明治6年「飯野陣屋図」・明治21年「下飯野陣屋之図」(文献②・⑤)
- ③伊藤松太郎編 1889『飯野陣屋記』(文献②)



第90図 飯野陣屋跡全体図 (文献⑭) (1 : 3,500)

26. 【小久保陣屋】（大名陣屋）富津市小久保字弁天ほか  
 ／上総国天羽郡大貫村

1. 当主 田沼意尊おきたか一意おきなり齊
2. 封地 明治元（1868）年：上総国天羽郡・周准郡内  
10,000石～明治4（1871）年
3. 位置 県指定史跡弁天山古墳墳丘南西山麓の地。現  
富津市中央公民館一帯。
4. 規模 小久保藩陣屋絵図写（資料①）に拠れば、藩  
庁642坪、県知事邸440坪とあり、これに北側  
の役所地約800坪が加わる。
5. 歴史 田沼意尊は將軍家治世下（明和～天明）に  
あって一世を風靡した意次の子孫で、天保11（1840）年に家督を継いだ。文久元（1861）年に  
若年寄に昇進後、激動期の幕政で活躍した（天狗党事件鎮圧責任者等）。明治元（1868）年9  
月に遠江相良から上総小久保へ移されたが、同年中に病没し、養子意齊（岩槻城主大岡忠恕の  
子）が後を継いだ。意齊は明治2年、藩庁の建設に取りかかったが、同4年に廃藩となったの  
で果たして完成したかどうかはわからない。陣屋は現在の中央公民館前の駐車場に当たり、そ  
の南に「県知事邸」があった。公民館敷地は役所や藩校（明治2年創立盈進館）に相当し、周  
圍は士族屋敷地で占められた。なお、字名の弁天は弁天社に由来する。



第91図 小久保陣屋の位置

6. 関連文献

- ①富津市 1980『富津市史』史料集二
- ②富津市 1982『富津市史』通史
- ③久野 隆 1991（資料）「小久保藩陣屋跡碑について」（小久保藩資料展出品目録含）『西上総文化会報』第51号

7. 関連資料

- ①「小久保藩陣屋図」（文献②口絵）



図版87 小久保藩庁跡近景



図版88 小久保陣屋記念碑

## 27. 【その他の陣屋】

### 【茂原陣屋】（旗本陣屋）（茂原市茂原／長柄郡茂原村）

大久保忠佐（ただすけ）は忠世の弟で、長篠の合戦時にその働きを信長に賞賛された武者であった。天正18（1580）年、上総長柄郡に於いて5,000石を与えられ、陣屋を藻原に構えたものの、その位置は不明である。だが、当時の茂原の範囲からして、今の上茂原の内の一角（藻原寺周辺か）と推測される。慶長6（1601）年、関ヶ原の戦後配置に伴い、駿河国沼津に20,000石を以て移った。

### 【百首陣屋】（大名陣屋）（富津市竹岡／天羽郡百首村）

寛永10（1633）年、関宿藩主松平重勝（能見松平）の三男重則が10,500石で百首に入封した。文化7年に白河藩が設けた陣屋とは異なる場所と思われるが、その位置は不明である。7年後の寛永17（1640）年、下野皆川に移った。

### 【高滝陣屋】（大名陣屋）（市原市高滝字大和田／市原郡大和田村）

板倉重宣は三河幡豆を根本所領とし、天和3（1683）年、信濃伊那・佐久、上総市原に於いて20,000石を与えられ市原郡高滝に住したとされる（「寛政重修諸家譜」）。子の重高代の元禄12（1699）年、備中国庭瀬に移封されたが、この間に陣屋を構えなかったという考えもある（「二代目の板倉重高は元禄七年と九年の二度藩領大和田村の光巖寺を宿陣として入国されたのである。陣屋がなかったからと記されているのである。」（小幡重康 1992「高滝藩に陣屋はなかった」『上総市原』第8号）。

### 【小松陣屋】（旗本陣屋）（山武市小松字城の内ほか／上総国武射郡小松村）

「土芥寇讎記」には、保科正祥のこととして「所上総之内小松自江戸六十五里」とある。正祥とは上総飯野藩主正賢の初名であり、貞享3（1686）年に家督を継いでいる。正祥は正景の子で、正景の長兄が正光である。正光は秀忠の末子正之を養子として迎え入れた人物であるが、後に正之は松平に復している。正祥は兄が3人（早世）いることから、あるいは家督相続前に上総に所領を得ていたのであろうか。とすれば、延宝4（1676）年以降貞享3年までの間となる。小松には字城の内といって大塚氏の館跡と伝える地（現慈広寺：旧地成東町小柳八坂神社旧称慈眼寺）がある。ここが候補となろうか。



図版89 慈広寺近景

### 【若山陣屋】（旗本陣屋）（いすみ市日在字若山／夷隅郡若山村）

忍城主阿部正令の三男正房は、延宝5（1677）年、父の遺領夷隅郡内10,000石のうち、3,000石を分け与えられた。正房以降、正興－正儔と継ぎ、最後の邦之助で明治維新を迎えている。陣屋は海付きの領内若山村に設けられ、旧出光大原寮跡地一帯に該当する。現在、陣屋地北側は大きく削平され、陶磁器や貝が散乱する。また、その一角に陣屋碑が建てられている。



**【小西陣屋】（代官陣屋）**（大網白里市小西字殿前ほか／山辺郡小西村）

旗本関口作兵衛は正保期に代官となり、その子作左衛門は承応2（1653）年に同じく幕府代官として両総の幕領を支配し（『断家譜』）、「公儀之御普請ニ而陣屋を給り、知行所小西ニ居住ス」とある（「小西由緒書」）。この陣屋とは正法寺境内の一角と推測されるが、それ以上はわからない。関口作左衛門は延宝5（1677）年処罰され、石塔はこの正法寺境内に現存する。なお、関連資料等は川村 優氏の文献（「総州代官関口作左衛門処罰の背景－延宝5年親子三人切腹の経緯について－『房総の郷土史』第12号）に拠る。



図版90 正法寺近景（奥に関口氏石塔）

**【東金屋敷群】（旗本屋敷）**（東金市正気・豊成・福岡／上総国山辺郡）

天正18（1590）年、九十九里一帯には百石単位の徳川家臣団が配置された。その多くが関ヶ原戦以降の再編に伴い、当地を離れるので丁度10年間の屋敷地というものであるが、過渡期の様相を物語るものとして所謂東金領の範囲のみ取り上げた。その筆頭は本多正信や正次に属し、「七十騎の頭」（「寛政重修諸家譜」）となった余語氏（伊成）や菅沼氏（政次）等であり、前者は「大御所御放鷹の折から、伊成が邸宅に過らせ給ひ、御前近くめさせ給ひ（『徳川実紀』第二篇 国史大系）」たというから、まさしく鷹狩りの地である沼沢地に屋敷を構えていたのであろう。この点、地元の記録には「天正年中、権現様のご入国の節、三州表高橋に住居成られ候七十騎衆と申す御旗本を東金お場所村々へ引越し住居仰せ付けられ候」「権現様御入国の節初めて東金表お鷹場に仰せ付けさせられ、御入国最初のお鷹場にてござ候よし、すなわち、その節、酒井左衛門尉家来栗原右衛門と申す仁、召し出ださせられ、御知行三百石下し置かれ」とある（小倉家文書／『九十九里町史』各論編上巻）。彼らは、本多氏に従い宇都宮へ移っている。この他に、山辺郡内で200石を与えられた鈴木重友ほかがあげられる。その個々の比定地は今後の課題である。

**【その他】（旗本陣屋）**（大網白里市細草・いすみ市桑田・睦沢町寺崎）

その他、夷隅郡桑田村ほか1,550石を領した伊沢政重、長柄郡寺崎郷1,125石を領した蒔田頼久等が近世初めに在所に陣屋を構えた可能性があるが、指摘するに留める。

### 第3節 安房の陣屋

#### 1. 【勝山陣屋】(大名陣屋) 安房郡鋸南町勝山字栄町

ほか／安房国北(平)郡二浜(勝山)村

##### 1. 当主 ①内藤清政—政勝

②酒井忠国—忠胤—忠篤—忠大—忠鄰—忠和  
—忠嗣—忠—忠美

##### 2. 封地 ①元和8(1622)年：安房国内(北郡・長狭郡内ほか)30,000石～寛永7(1630)年：藩主若年故15,000石収公～延宝4(1676)年：下野国転封

②寛文8(1631)年：越前・安房国内(北郡)10,000石～明治4(1871)年廃藩

##### 3. 位置 中世勝山城下東麓一帯。

##### 4. 規模 文献③には「四反六畝七歩…現在の漁業組合に至る道路の南側が内濠で、役場裏の東西路が外堀のあと…正門前には今、門前の「長八」の名が残っている」と記され、幕末の「勝山藩陣屋図」および明治初期の勝山県庁の図が紹介されている。ほぼ陣屋の範囲を示すものであろう。

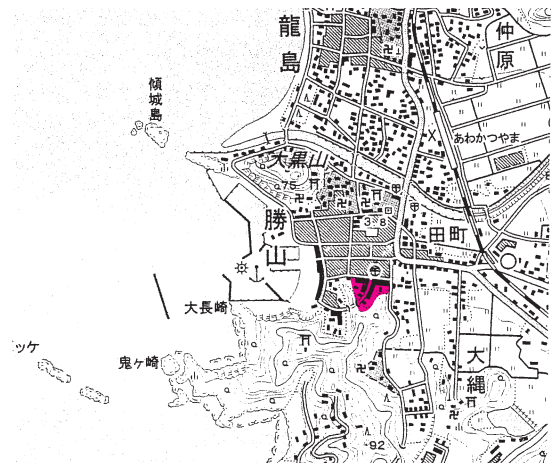
##### 5. 歴史 ①内藤氏は徳川政権初期に能吏として頭角を現し、清政代に安房へ移封となった。しかし、清政は継嗣無く一時的に断絶した。寛永3(1626)年、先祖の功績により弟の政勝が継ぐかたちで再度復活したものの若年で没し、嫡子重頼は万石以下となって延宝期に所領を下野国に移された。②酒井忠国は「寛文八年…安房国平郡、越前国敦賀郡のうちにをいて一万石を分ち賜ひ、安房国勝山に住」した(「寛政重修諸家譜」)。越前敦賀領支配に当たっては野坂代官所が置かれた。後の天和2(1682)年、安房・越前内で5,000石を加増され(15,000石)、同3年に忠胤が相続し、弟忠成(竜島酒井氏祖：現最誓寺地)に3,000石を分与した。忠鄰(ただちか)代の明和7(1770)年には領内の早魃に伴って、忍足左内事件が起きた。明治2年、儒学校(藩邸外の元練武館)が創立されている。なお、別名加知山藩とは明治2年に同名の藩(勝山藩)があったため改称したことによる。

##### 6. 関連文献

- ①千葉縣教育会編 1936『千葉縣教育史』巻一
- ②千葉県 1968『千葉県史料』近代編・明治初期1
- ③鋸南町 1969『鋸南町史』
- ④鋸南町 1995『鋸南町史』通史編(改訂版)
- ⑤荒井英次 1972「幕末安房勝山藩の藩政改革」『地方史研究』119号
- ⑥佐野邦雄 1998『安房勝山藩考』上

##### 7. 関連資料

- ①「勝山陣屋図」(文献③)



第92図 勝山陣屋の位置



図版91 勝山陣屋跡近景(背後中腹から)

2. <sup>とうじょう</sup>【東条陣屋】（大名陣屋）鴨川市東町字宝性寺ほか／

安房国長狭郡東条村

1. 当主 西郷正員—<sup>まさかず のぶかず ひさかず</sup>延員—寿員

2. 封地 元和6年（1620）：安房国安房郡・長狭郡・朝夷郡内10,000石～元禄5（1692）年：下野国上田移封

3. 位置 資料①に拠れば、当初は天津の日澄寺を仮陣屋としたという。文献⑥の調査報告書で陣屋跡の一部と推測されている地区が調査されている。

4. 規模 1995年の発掘調査によって、近世に属する7条の溝が検出されており、「西郷氏関連遺構」として報告されている。約29,000㎡の調査範囲内に5区画認められるが、その全容は捉え得ない。区画内には明瞭な近世の遺構は少なく、範囲外を含めた館跡の復元が求められる。

5. 歴史 天正18（1590）年、5,000石で生実に入った西郷氏は30年後の元和6（1620）年に安房国朝夷・長狭2郡において5,000石を加増されて10,000石の大名となり、東条に陣屋を置いた。西郷氏の東条入封には他に寛永5（1628）年説があるが、どちらをとるかによって、資料①の縄張・作事、移転の年も異なる可能性がある。なお、多聞寺に西郷正員の母の供養塔があるのは当初同寺を仮陣屋とした結果でもあろう。東条・永明寺には家臣の墓がある（文献⑦）。



第93図 東条陣屋の位置



図版92 東条陣屋跡近景



図版93 永明寺西郷氏家臣石塔群

6. 発掘調査概要

東条陣屋跡は西郷氏館跡として把握されており、現鴨川市東町宝性寺他の地に所在する。鴨川地溝帯を見下ろす清澄丘陵の南麓平野部に立地し、標高は約15mである。平成7年度に比定地の一角に当たる27,000㎡が発掘調査され、中世の遺構群に混じって近世遺構群が検出されている。

確認された近世の遺構は大きく3区画に分けられる。上幅4m、下幅凡そ2m、深さ1～1.2m程の大溝が鍵の手状に屈曲して構成する2区画とそれより規模の劣る溝が巡る1区画であり、前者の北西に後者

が付属するという構成である。区画内は奈良・平安時代の住居跡や中世の遺構群は稠密に検出されているが、「館の遺構は皆無」であったと報告されている。その一方、大溝からは西郷氏時代の「70年間のまとまった良好な近世資料」が出土したとされる。確かに大溝より出土した陶磁器は17世紀代の瀬戸・美濃、唐津、肥前からなるもので、西郷氏が陣屋を営んだ期間と一致する。

そうであれば、当然区画内からは当時の遺構が見つかってよいはずである。中世の溝囲みの区画（東條氏の館跡か）内からは掘立柱建物群を始め、土坑、井戸などがまとめて検出されている一方、近世でそれが見られないというのは陣屋建設に当たって盛り土をした可能性があるが、大溝で検出された区画自体が調査区北西部に相当することから、遺構の希薄地であったとも考えられる。いずれにせよ、この問題に決着を付けるにはより東側の地の意図的な発掘が必要であろう。なお、詳細は第5章参照の事。

## 7. 関連文献

- ① 齊藤夏之助 1908『安房志』 多田屋書店
- ② 千葉県教育会編 1936『千葉県教育史』 卷一
- ③ 千葉県 1968『千葉県史料』 近代編・明治初期 1
- ④ 早川庄司 1979「安房東条藩主、西郷氏母の供養塔について」『会報』 第12号 館山市文化財保護協会
- ⑤ 佐藤文智 1997「生実領主西郷氏の変遷について」『千葉いまむかし』 No.10 千葉市教育委員会
- ⑥ 杉山春信ほか 2000『東條地区遺跡群発掘調査報告書』 鴨川市遺跡調査会
- ⑦ 鴨川市史編さん室 1999『新訂 東条村誌』
- ⑧ 井上哲朗 2009「鴨川市西郷氏館跡の陶磁器類－中世屋敷から近世陣屋への変化－」『房総中近世考古』 3号 房総中近世考古学研究会

## 8. 関連資料

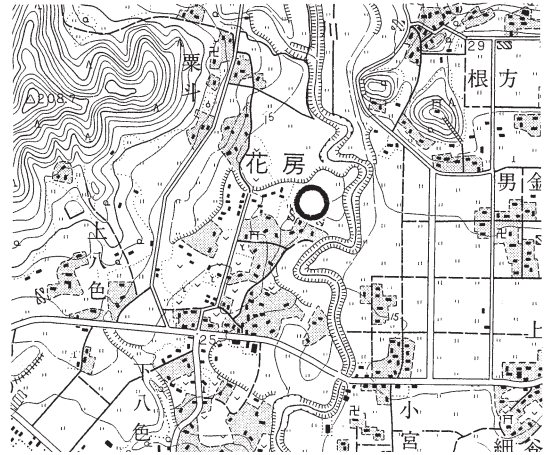
- ① 享保14年「西郷若狭守様東條御屋敷御居立之覚」（鴨川市史編さん室所蔵文書）



図版94 多聞寺西郷正員母石塔

3. 【花房陣屋（城）】（大名陣屋）鴨川市花房字萩原ほか／安房国長狭郡花房村

1. 当主 西尾忠篤<sup>ただあつ</sup>
2. 封地 明治元（1868）年：上総・安房国内（長狭郡内）35,000石～明治4（1871）年
3. 位置 当初、横渚村藏の台の岩槻藩陣屋跡を仮陣屋とし、後に花房村萩原台に築城を開始したが、明治4年廃藩置県により中止。
4. 規模 不明。西尾氏は城持ち大名であり、築城を計画したであろうが、どの程度進んだかは明瞭でない。予定地は東側に突き出した懸崖状の段丘面であり、現在宅地化が進行している。
5. 歴史 明治2年5月花房村萩原を城郭予定地とする。明治2年8月、横渚村藏の台の岩槻藩取締出張所を仮藩庁とする。明治3年2月、政府から藩役所・知事宅を下賜され、藩士屋敷地を広場・西・東・和泉・貝渚・八色・滑谷・花房の地に取り立て決定する。現地の滝口神社は鎮守氏神という。明治4年2月、藩校修道館建設（文献③）。明治4年7月、花房藩を廃し花房県を置く。明治4年11月花房県廃止。なお、明治4年時の士族は1318人であった。



第94図 花房陣屋（城）の位置

6. 関連文献

- ①千葉県 1968『千葉県史料』近代編・明治初期1
- ②千葉県教育会編 1936『千葉県教育史』巻一
- ③鴨川市郷土史研究会 1998『花房藩』
- ④鴨川市 1996『鴨川市史 通史編』

7. 関連資料

- ①「花房藩家臣屋敷予定絵図」（国立公文書館／文献③）
- ②「花房藩々屋敷配置絵図」（森住家文書）
- ③「花房藩士 席順調」（『新訂 吉尾村誌』鴨川市史編さん室 1995）



図版95 萩原台遠景



図版96 滝口神社近景

4. 【御蔵陣屋】(大名陣屋) 南房総市山名字陣屋畑ほか

／安房国安房郡山名村

1. 当主 三枝守昌もりまさ—守全もりあきら—守輝もりてる
2. 封地 寛永15(1638)年：安房国安房郡・平郡・朝夷郡内10,000石～元禄10(1697)年
3. 位置 真言宗智光寺前の通称御陣屋と呼ばれる一帯が該当する。なお、南側の山は通称花見台といい、花見台南東を馬場と称する。
4. 規模 多少丘陵性の地形ということもあり、正確さに欠けるが、凡そ南北90m、東西100m程と推測される。
5. 歴史 三枝守昌は甲斐国に生まれ、秀忠の小姓から出発し、寛永15年に安房国安房郡内ほかで10,000万石を与えられた。同16年に守昌が没し、守全が継ぎ、同17年には守昌次男頼増(母諏訪氏・称諏訪)に3千石を分与した。元禄10年(1697)に陸奥・伊豆国内6,500石を以て移封された。陣屋の設置場所・年代については、一応寛永15年の入部時としたが、資料②には屋代氏入封以前の北条陣屋は「三枝撰津守の館なりし」と記す。北条から御蔵へ移転したのであろうか。なお、三枝守昌と諏訪頼増の石塔は約300m南の曹洞宗智蔵寺に現存する。現在、一帯は畑・民家・神社・山林となっており、遺存状態は良い。



第95図 御蔵陣屋の位置

6. 関連文献

- ①君塚文雄 1979「安房の封建大名であった三枝氏について」館山市文化財保護協会『会報』第12号
- ②三芳村 1984『三芳村史』

7. 関連資料

- ①智蔵寺内三枝守昌・同頼増石塔銘文(文献②)
- ②「安房風土聞書」(千葉県立中央図書館蔵)



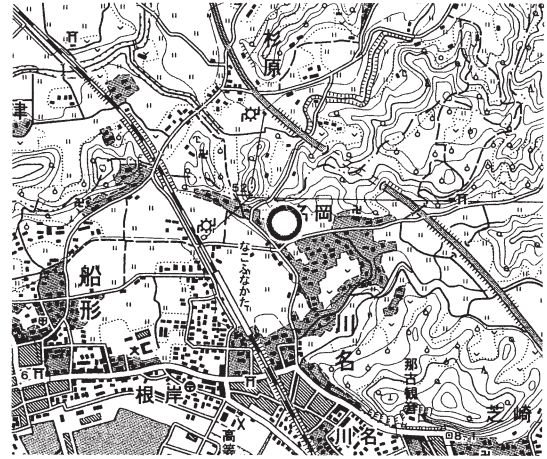
図版97 御蔵陣屋近景



図版98 智蔵寺三枝氏石塔

5. <sup>ふなかつ</sup>【船形陣屋】（大名陣屋）館山市船形字御霊ほか／安房国安房郡船形村

1. 当主 平岡道弘<sup>みちひろ</sup>
2. 封地 元治元（1865）年：安房国安房郡内ほか10,000石～明治元（1968）年廃藩
3. 位置 内房線那古船形駅北側約200mの八束街道に面した地。
4. 規模 凡そ1町四方。かつては南北に堀と石垣の一部が遺存した。鈴木家に当時の陣屋裏門（資料①）があったが、平成2年に解体された。
5. 歴史 平岡道弘は旗本藤沢家から養子に入り、徳川家慶付きの小姓となって頭角を現し、後に徳川家定・家茂と仕え、文久2（1862）年には若年寄となった。元治元（1865）年5,000石を加増されて大名に列し、翌慶応元（1865）年に領地の平郡船形村御霊に陣屋の建設を開始したが、明治元年、完成を見ずに廃藩となった。なお、陣屋建物の作事に当たり、地元の大工が地形・内装を除き建物1棟（間口8間半・奥行3間半、茅葺き）を300両で請け負ったことや、陣屋外構工事に従事した人足一覽、役人出張費などの資料が残されている（文献②・③）。



第96図 船形陣屋の位置

6. 関連文献

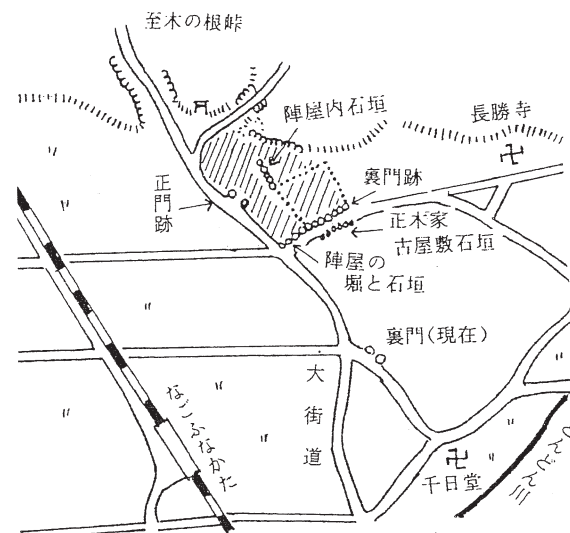
- ①千葉県安房郡教育会 1926『千葉県安房郡誌』
- ②正木高明 2000「幻の船形陣屋について」『館山と文化財（会報第34号）』館山市文化財保護協会
- ③館山市立博物館 2002 平成14年度企画展図録『鏡ヶ浦をめぐる歴史』

7. 関連資料

- ①船形陣屋裏門写真（文献②）



図版99 船形陣屋跡遠景

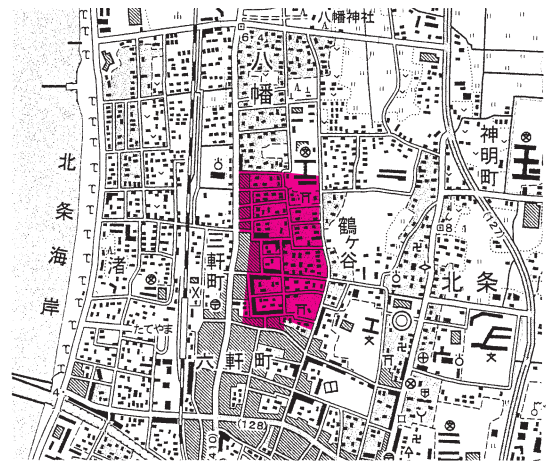


第97図 船形陣屋見取図（文献②）

6. 【北条陣屋（鶴ヶ谷陣屋）】（大名陣屋）館山市北条

字鶴ヶ谷ほか／安房国安房郡北条村

1. 当主 本多正訥—正憲
2. 封地 明治3（1870）年：安房国安房郡内ほか40,000石～明治4年
3. 位置 旧北条村鶴ヶ谷の現安房高校から諏訪神社に至る地。
4. 規模 資料②に拠れば凡そ南北400m、東西120mほどの不整形長方形の範囲となるが、北側にも藩士屋敷地が存在する。
5. 歴史 明治3年、長尾藩本多氏は北条村鶴ヶ谷に陣屋（城）を移したが、翌4年廃藩置県となった。陣屋内には家中屋敷200軒があり、この他に新塩場・八幡村・小松村・国分村4か所に分散して70軒が存在した。藩庁、御殿、藩士屋敷地ほかの区画は資料②で紹介されている。陣屋は明治7年まで県の出張所となった。北側の隣接する八幡共同墓地には長尾藩士たちの墓が現存する（文献⑥）。



第98図 北条（鶴ヶ谷）陣屋の位置

6. 関連文献

- ① 齊藤夏之助 1908『安房志』 多田屋書店
- ② 千葉県 1968『千葉史料』近代編・明治初期1
- ③ 千葉吉男 1983「長尾藩史考」『会報15周年記念第15号別冊』館山市文化財保護協会
- ④ 千葉吉男 1983「続・長尾藩史考（二）」『館山と文化財』第17号 館山市文化財保護協会
- ⑤ 池田和弘 2001『北条村史』
- ⑥ 吉野 茂 2003、2004、2006「房州長尾藩私録（一）、（二）、（三）」『館山と文化財』37、38、39、館山市文化財保護協会

7. 関連資料

- ① 「房州長尾藩資料諸事心覚留帳抄」（吉野 茂 2002 館山市文化財保護協会）
- ② 「北条陣屋図」（藤井家文書／文献③④）
- ③ 明治7年「国分村萱野藩士邸図」（文献⑤）



図版100 鶴ヶ谷陣屋南東番所跡近景

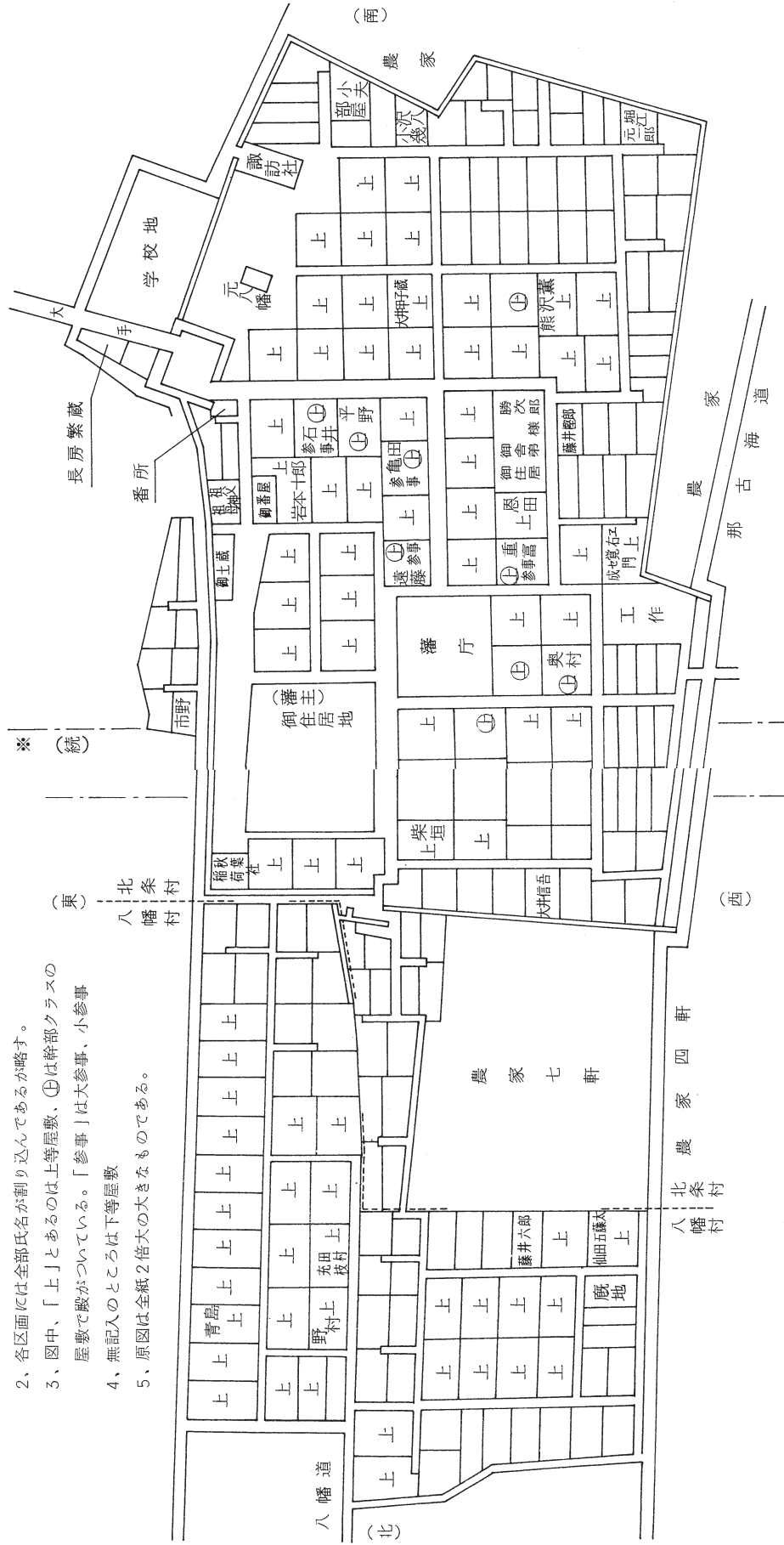


図版101 鶴ヶ谷陣屋藩庁跡近景



筆者註記

- 1、この図は標題がないが「北条陣屋」である。
- 2、各区画には全部氏名が割り込んであるが略す。
- 3、図中、「上」とあるのは上等屋敷、⊕は幹部クラスの屋敷で殿がついている。「参事」は大参事、小参事
- 4、無記入のところは下等屋敷
- 5、原図は全紙2倍大の大きなものである。



第99図 北条（鶴ヶ谷）陣屋見取図（資料②）

7. 【北条陣屋】(大名陣屋) 館山市北条字仲町ほか／安

房国安房郡北条村

1. 当主 ①屋代忠正—忠興—忠位  
②水野忠定—忠見—忠韶  
③遠藤胤緒—胤城

2. 封地 ①寛永15 (1638) 年：安房国内 (安房・朝夷郡内) 10,000石～正徳元 (1711) 年所領収公  
②享保10 (1725) 年：上総・丹波・安房国内 (安房・朝夷・長狭郡内) 12,000石～文政10 (1827) 年上総国椎津15,000石  
③文久元 (1861) 年：近江・和泉・安房国内 (安房・平郡内) 12,000石～明治元 (1868) 年

3. 位置 現在の館山警察署・北条病院一帯であり、文献① (巻之二) には、「北条町城腰と称する所。是れ其旧城の跡なりと云。」とある。

4. 規模 水野氏時代の規模は1,800坪 (資料③) ないし約2,000坪 (天明7年時点：文献③)、一方、幕末～明治初頭では約1,800～1,900坪であり、大きな変動はない。

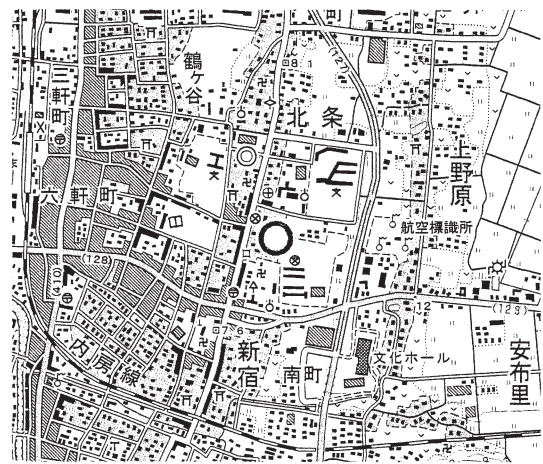
5. 歴史 ①屋代氏は信濃国の出で、武田氏次いで徳川氏に仕え、忠正代に松平忠長家の家老を経て、寛永15 (1638) 年に安房国安房郡内ほか10,000石を与えられ、北条に陣屋を構えた。しかし、3代忠位代の正徳元 (1711) 年、万石騒動の不手際から封地収公・逼塞となった。②水野氏は徳川家康の生母である於大の方の出た水野宗家の分家筋に当たり、忠定の代の享保10 (1725) 年に信濃国の領地を安房国安房郡ほかに移され、北条を居所とした。屋代氏の陣屋跡に入ったと思われるが、改変したかどうかは定かでない。資料③には「四圍土居柵を設松杉枝を争ふ」と見える。3代忠韶は文化5 (1808) 年に若年寄に昇進し、17年後に上総国椎津に移封された。③遠藤氏は戦国期の郡上八幡城主から続く家系で、文久元 (1861) 年、所領の一部を安房国に移され、安房・平郡内約5,300石を与えられた。同氏は近江国三上に陣屋を置いており、飛地領支配のために北条仲町に陣屋を構えた。明治元年、安房国に駿河国田中の本多氏が入封 (長尾藩) したのに伴い、陣屋は廃された。

6. 関連文献

- ①齊藤夏之助 1908『安房志』 多田屋書店  
②小笠原長和 1966「館山藩」『物語藩史』所収  
③池田和広 2001『北条村史』 宮澤書店

7. 関連資料

- ①『鶴牧藩日記』 (清文堂 1972)  
②「万石騒動目録」 (『房総叢書』 第四巻)  
③「安房風土聞書」 (千葉県立中央図書館蔵)



第100図 北条陣屋の位置



図版102 北条陣屋跡現状

8. 【館山陣屋】(大名陣屋) 館山市上真倉字根古屋ほか

／安房国安房郡上真倉村

1. 当主 稲葉正武—正盛—正巳—正善
2. 封地 寛政元年(1789):上総・安房国内(安房郡・長狭郡・平郡内ほか)10,000石～明治4(1871)年
3. 位置 寛政3年、陣屋を里見氏の館山古城下の根古屋(庚申山南麓の平地)に建設した。安政2年の資料①には「里見忠義古城山の麓東南ニあり」と記す。
4. 規模 規模については不明ながら、地形から判断して16,000㎡程であろうか。
5. 歴史 安永6(1777)年、正明(まさあきら)代に長狭郡内2,000石を与えられ、以後、正令—正武と継ぎ、正武代の寛政元(1789)年、安房、長狭、平、上総4郡内3,000石を加増されて10,000石となる。「寛政重修諸家譜」には、「(寛政)三年十一月安房国館山に居所を補理す。」とみえる。正明は3,000石の旗本から御側衆となり、田沼意次の引き立てにより13,000石の大名となった。幕末期の当主正巳は若年寄次いで老中となっている。藩校を立教館といい、明治2年に浜町藩邸内の敬義館を移転した。



第101図 館山陣屋の位置

6. 関連文献

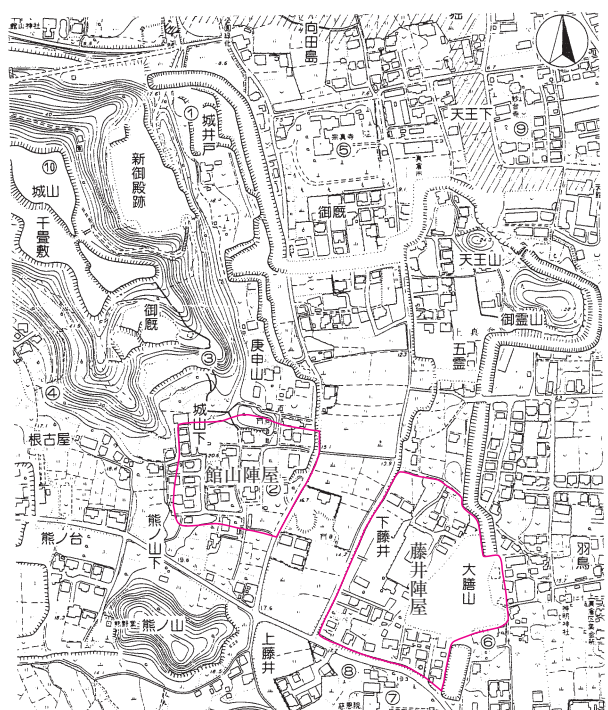
- ①千葉県教育会編 1936『千葉県教育史』巻一
- ②小笠原長和 1966「館山藩」『物語藩史』所収
- ③千葉県 1968『千葉県史料』近代編・明治初期1
- ④岡田晃司 2010「古文書と伝承から探る歴史の痕跡—安房館山に所在した旗本陣屋—」『古文書の語る地方史』

7. 関連資料

- ①「安房風土聞書」(千葉県立中央図書館蔵)



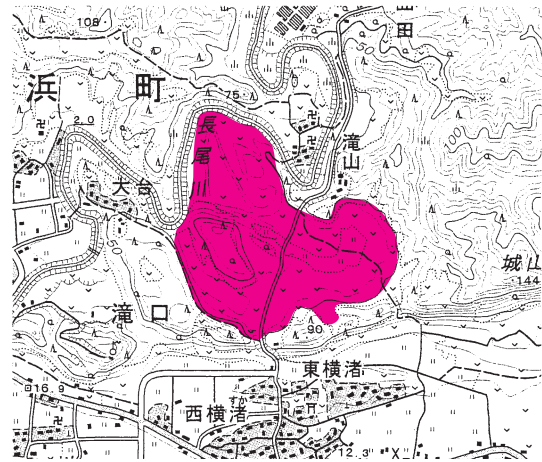
図版103 館山陣屋跡近景



第102図 館山城跡と館山陣屋(『千葉県の歴史』中世資料編)

9. 【長尾陣屋（城）】（大名陣屋）南房総市大原字泉ほか／安房国安房郡白浜村

1. 当主 本多正訥—正憲
2. 封地 明治元（1868）年：上総・安房国内（安房郡・平郡・朝夷郡・長狭郡内）40,000石～明治4（1871）年
3. 位置 南東約1.5kmに野島岬を見下ろす、南房総市大原字泉の標高約42mの長尾川段丘面上。
4. 規模 かつての段丘面内約500m四方の地であるが、一部屋敷地は飛び地のように周囲に散在し、城郭構えの様相は窺えない。
5. 歴史 明治元年に徳川宗家が駿河に移ったことによって、押し出されるように田中藩本多正訥が安房長尾に入封した。藩士は明治元年から翌2年にかけて長尾へ移ったが、その夏の台風によって陣屋内は甚大な被害を受け、翌3年には北条村鶴ヶ谷へ移転を開始し、陣屋も新たに建設したものの、翌4年には廃藩置県となった。



第103図 長尾陣屋（城）の位置

6. 関連文献

- ①鈴木 昭 2002『千葉県安房郡白浜町 長尾陣屋跡・泉遺跡』総南文化財センター
- ②千倉町 1985『千倉町史』
- ③千葉県安房郡教育会 1926『千葉県安房郡誌』
- ④千葉吉男 1982「長尾藩史考」『会報』第15号 館山市文化財保護協会
- ⑤千葉吉男 1983「続・長尾藩史考（三）」『会報』第18号 館山市文化財保護協会
- ⑤吉野 茂 2002「房州長尾藩資料 諸事心覚留帳抄」『館山と文化財』会報第36号
- ⑥吉野 茂 2004・2005・2006「長尾藩 私録（一）・（二）・（三）」『館山と文化財』会報第37号・38号・39号

7. 関連資料

- ①明治3年「長尾城地分見縮図」（恩田家文書／館山市立博物館蔵）



図版104 長尾陣屋跡現状



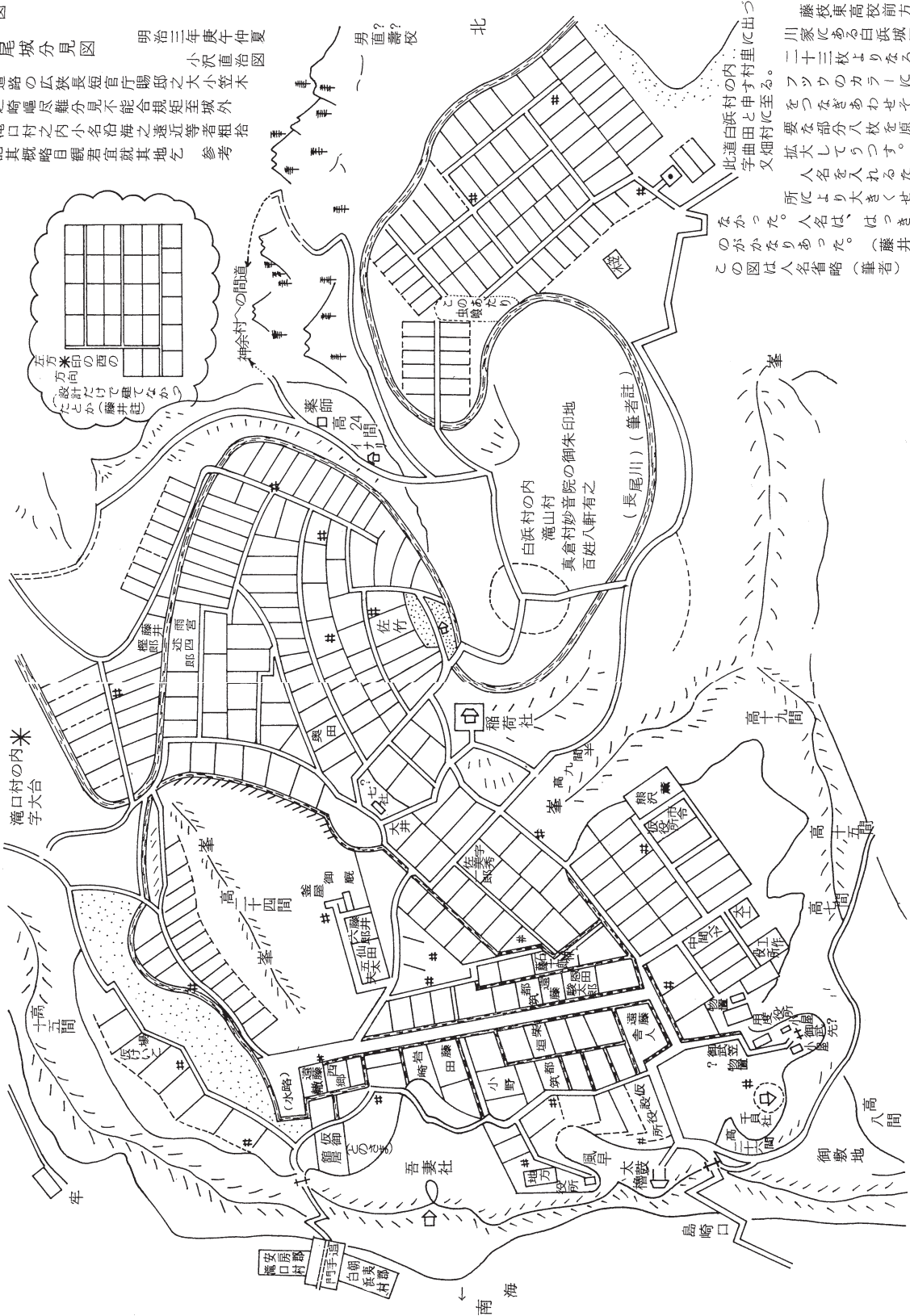
図版105 長尾陣屋北西馬場跡現状

第一図

長尾城分見図

明治三年庚午仲夏  
小沢直治図

城中道路の広狭長短官庁賜邸之大小笠木  
両路之崎嶇尽難分見不能合規矩至城外  
白旗滝口村之内小名沿海之遠近等悉祖拾  
載而記其概略目觀君宜就其地之参考



此道白旗村の内...に出つ  
又畑村に至る。  
藤牧東高牧前方至近の相  
川家にある白旗城図、日本紙  
二十三枚よりなる部分図を  
アソウのカラーにとりこれ  
をつなぎあわせそのうち主  
要な部分八枚を原紙一枚に  
拡大してうつす。  
人名を入れるためマス  
所により大きくせねばなら  
なかつた。人名は、はつきりせぬも  
のがかなりあった。(藤井註)  
この図は人名省略(筆者)

第104図 長尾城分見図写 (文献④)

## 10. 【その他の陣屋】

【勝山（板井ヶ谷）陣屋】（旗本陣屋）（安房郡鋸南町竜島字板井ヶ谷ほか／安房国北（平）郡二浜（勝山村））

天和3（1617）年、勝山藩主酒井忠胤の二男酒井忠成<sup>ただなり</sup>が安房国北郡内3,000石を分け与えられ、本家の陣屋に隣接する字板井ヶ谷（最誓寺寺域内）に陣屋を構えた。忠成の後は、忠棟<sup>ただむね</sup>—忠亮<sup>ただすけ</sup>—忠頼<sup>ただより</sup>—忠徹<sup>ただあきら</sup>と継ぎ、鉄三郎代に明治維新を迎えた。資料として、板井ヶ谷「勝山陣屋絵図」（『鋸南町史』）がある。

【前原陣屋】（岩槻藩出張陣屋）（鴨川市前原字蔵ノ台／安房国長狭郡前原村）

岩槻藩大岡氏は安房領（長狭郡・朝夷郡）支配のために長狭郡前原に陣屋を置いた。幕末には房総沿岸部の海防強化が計られ、嘉永7年の岩槻藩「総江勤番中日記」に拠れば、陣屋詰め<sup>まえばら</sup>の藩士が小使を入れて10名前後のところを半年交替で新たに13名の藩士が派遣された。そのため、垣根を越えた裏手に長屋の増築が行われ、これによって間の垣根が取り払われたこと、また、地業の石は加茂川から運ぶ一方、材木は江戸表から船で運んだこと、瓦も到着したことなどが記されている。陣屋の位置は横渚字蔵ノ台の稲荷神社付近と思われるが、現在市街地と化し、旧状は窺えない。



図版106 前原陣屋跡(字蔵ノ台)

【藤井陣屋】（旗本陣屋）（館山市下真倉字下藤井／安房国安房郡真倉村）

藤井陣屋については従来断片的に扱われることはあったが、近年岡田晃司氏が具体的な史料をもって紹介したことにより（「古文書と伝承から探る歴史の痕跡—安房館山に所在した旗本陣屋—」『古文書の語る地方史』2012）、漸くその実態が見えてきた。旗本川口宗直（2,700石）は下総青菅陣屋川口氏の後裔に当たり、元禄14（1701）年に印旛郡内の領地を安房郡内に移されたが、元文4（1739）年には、陣屋敷地を館山の商人に売却していることから、この間、陣屋による安房知行所支配が行われたことになる。陣屋は近世里見氏時代の東南外郭部に当たる大膳山西麓一帯と想定されており、略長方形（八反三畝）の地であった。この川口氏の前には、石川氏（政次—政往）が寛永2（1627）年～元禄11年にわたって藤井陣屋で安房郡内4,500石を支配したので、川口氏は石川氏の陣屋跡へ入ったと考えられる。ところで、売却した理由が、払下げ地への移転費用捻出にあり、且つその移転地が指摘されたように谷を挟んだ対面に位置する後の館山藩陣屋地で、加えて天明2（1782）年に安房郡の領地を上総国内に移されたことを考慮すると、水野氏が寛政3（1791）年に陣屋を「補理」と記された（寛政重修諸家譜）のも領ける。そもそもその淵源が里見氏の重臣正木時茂の屋敷地に遡るとするならば、地頭は変われ長期にわたり使い古された陣屋（屋敷地）の一例とみる事が出来よう。



図版107 藤井陣屋跡近景

<sup>いわいど</sup>  
**【岩糸陣屋】（会津藩出張陣屋）**（南房総市岩糸字貴船／安房国安房郡豊田村）

安房北条村の宮大工吉野忠右衛門は鶴ヶ谷陣屋ほか多くの仏閣・仏像などの建設・製作に携わっているが、その一つに現南房総市（旧丸山町）岩糸陣屋があったらしい。それは同家に「岩糸御陣屋指図」（館山市立博物館『企画展「宮大工たちの世界」掲載』）がのこされていることから類推出来る。会津藩は江戸湾海防の一翼を担い、弘化4（1847）年には上総地域の防備を担当し、上総・安房両国内（安房国では平郡）に15,000石を領地替えされてその任についたが、嘉永6（1853）年には柳川藩と交替して品川台場の任についた。その代地として丸山、千倉を中心とした房総分領が設定されたことから、この安房領支配のための陣屋として建設されたのであろう。場所は字貴船の現鎌田家宅地に相当し、規模は1反4畝15歩で、役所（指図には板の間1、畳の間8、それに吟味所等が確認）のほかに、牢屋や長屋があった（『丸山町史』）。なお、陣屋詰役人は代官ほかの藩士10数名のもと、領内の名主が任命された。しかし、文久元年に幕領となるに従い、陣屋も廃されたと思われる。

<sup>だいり</sup>  
**【大里陣屋】（旗本陣屋）**（鴨川市大里字宮畑ほか／安房国長狭郡大里村）

信濃小笠原氏の一族の小笠原信喜は延享4年に上総天羽・安房長狭郡内において1,200石を与えられ、併せて2,000石となったが、このとき以降長狭郡内に陣屋を構えた可能性がある。その後、宝永～天明期に安房国また上野国内で加増され、天明7年には7,000石の大身旗本となった。子の信成以降、子孫は相継ぎ明治維新を迎えている。陣屋は加茂川に面した段丘上にあり、遺跡分布地図では「小笠原氏陣屋跡」として、規模100m×150mと所載される。